

早坂愛は避けられたい  
～有能侍女の恋愛伯仲  
戦～【完結】

鍵のすけ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

恋愛は戦！

それはプライドとプライドのぶつかり合い。さながら侍同士の果たし合いと言っても差し支えないであろう。

合戦の場は、東京都港区に拠点を置く私立・秀知院学園。

侍の名は、白銀御行、そして四宮かぐや。

だが！ 残念ながら今回はこの侍2人の恋愛頭脳戦ではない！

これは互いが互いを告らせようとする片翼である四宮かぐやの侍女にして親友とも言える少女——早坂愛が最も憎み、そして最も気を取られた男との恋愛伯仲戦なのであ



# 目次

第1話 小倉次郎は看病したい

96

第1話 早坂愛は落ち着きたい | 1

第1話 早坂愛は看病し返したい

第2話 小倉次郎は楽しみたい | 11

106

第3話 小倉次郎は話したい | 20

第1話 早坂愛は看病し返したい続

第4話 早坂愛は言い返せない | 28

116

第5話 四宮かぐやは問い詰めたい

第1話 小倉次郎は口を滑らせたくな

39

い | 127

第6話 早坂愛はかばいたい | 48

第1話 小倉次郎は呼び出されたくな

第7話 小倉次郎は覗きたい | 58

い | 137

第8話 小倉次郎は謝りたい | 68

第1話 小倉次郎は言いくるめたい

第9話 小倉次郎は食したい | 78

147

第10話 小倉次郎は心配したい

第1話 小倉次郎は恥ずかしがりたく

87

ない

第18話 早坂愛は聞きたくない

156

166

第19話 小倉次郎は始めたい

|

176

最終話 早坂愛は避けられない

|

185



## 第1話 早坂愛は落ち着きたい

——仕える者とは。

仕える者とは、主の生活の良し悪しを決定づける者。

仕える者とは、主の明日への意欲を滞りなく醸成させられる者。

仕える者とは、主の恋愛頭脳戦を影から支えられる者なのだ。

(かぐや様、人払いは終わりました。あとは手はず通り、会長にアタックを。あわよくばさっさとくつつけ)

新聞やテレビ、はたまた雑誌で絶対に知っているであろう名前の家の子ども達に通う名門校、その名は私立・秀知院学園。

その中でも更に知名度のある怪物家である四宮家に仕える侍女・早坂愛は秀知院学園を実質的に治める生徒会室の扉の前に立っていた。

これも主である四宮かぐやから下された特命である。

(今日は自分にとって相手はどんな存在なのかを調べるといふ心理テストで会長に告白

を促す、という作戦だったか。……相変わらず回りくどい)

非常に聡明な主の作戦にある意味で感心しながら、早坂は前方、そして窓から見える景色に意識を回す。

早坂に下された使命は、生徒会室に誰も寄り付かせない事。パツと思いつくだけでも書紀・藤原千花、会計・石上優、会計監査・伊井野ミコ、後はその他数名といった具合。生徒会室に寄り付く者は実はそう多くないが、彼女はそれがとても意義のある使命だと理解している。

人数こそ少ないが、それぞれが個性の塊であるため、その対応には肉体的にも精神的にも負担を強いられるのだ。

「ん……？」

誰かの気配を感じた。

早坂は思考を切り替え、叩き込んでいる頭の中の対応マニュアルのページを開いた。

この時間ならば藤原千花、もしくは石上優のどちらか。この前者は置いておいて、後者は楽な部類である。

出来れば石上であれ——そう思いながら、早坂は廊下の曲がり角からやってくる人物に注意を向ける。



「ふあああ〜」

欠伸。

疲れたり眠くなったりした時、口が自然に開いて行われる深呼吸。

傍から見れば、相当疲れているのか、それともただやる気が無いと取られるかの究極の二択。

今、廊下から現れた少年は、あろうことに近寄りが見たい生徒会室付近でそれを行った。

少年は肩まで伸びた髪を後ろで束ね、縁なし眼鏡を掛けている。

言葉を選べば『地味』、言葉を選ばなければ『根暗そう』。

「あ」

「あ」

少年が早坂に気づいた。同時に、早坂も相手を確認する。

今はギャルモードの早坂愛、人当たりの良さそうな笑顔を浮かべる。対する少年も相手に不快感を与えないよう笑顔を浮かべる。

「……」

「……」

少年、生徒会室に接近。それを確認する前には早坂は既に歩み寄っていた。

互いに腕を伸ばせば触れ合える距離。見つめ合う2人。さながら恋人のように。笑顔を浮かべたまま、早坂は口を開いた。

「誰がいつここに来ることを許可した小倉ア……？」

「先生に頼まれたからここに来たってことを想像出来ないのかな早坂ア……？」

対する少年、小倉<sup>おぐら</sup>次郎<sup>じろう</sup>もにこやかな笑顔でそう返した。

火花が飛び散らんばかりに視線をぶつけ合うは数瞬。

早坂は首だけを動かし、場所替えの意思を示した。

誰からも聞かれなさそうな物陰で会話は続行される。

「私、言ったよね？　かぐや様が今日、ここでまた会長と一戦交えるから来るなって私、言ったよね？」

「俺もかぐや様キレさせたくないから近寄るつもりなんて毛頭なかったんだけどな？」

先生が急ぎの書類持つていけって言うからな？　俺も断腸の思いで来ている訳。それを汲み取って欲しいな？」

「そういう事が起きたら私に一報入れろ、とも指示をしていたはずなんだけど」

そこで小倉、目を丸める。

「あれ？ そうだったか？ ごめん、忘れてた」

「今ならスタンガンで気絶させた後、無様な姿にして広場に放置するだけで許してあげられるけどどうする？」

「それなら、この前の五草製薬株式会社の社長夫人が来た時に用意しようとしていたシルバーの1本の根本が少し曇っていたことに気づいた俺がフオローした件で相殺出来ないか？ あれは寺田使用人の首が飛んで、早坂も責任追及される案件だったと思うけどなあ？」

「ああ言えばこう言う……。一応、私が上司だということとは理解しているよね？」

ここまでの流れでお気づきの者は既にいるだろう。

小倉次郎は、四宮家の使用人である。

そして目の前で今、会話をしている早坂こそ小倉の上司とも言える存在。

四宮家において、早坂愛の存在は必要不可欠。20人前後しかいない使用人を束ね、なおかつ四宮の名前を落とさないように『質』を維持し続けている大黒柱とも言うべき存在。

そんな彼女と小倉は同年代。

「そんなもん理解しているよ。とても有能で、敬うべき存在の早坂さんだものな」

「……アンタが言うのと、嫌味にしか聞こえない。まあ、良い。さっさとこの場から離れて。私は戻るから」

そこで持ち場を離れすぎたことに気づいた早坂は会話を切り上げようとした。こうしている間にも不測の事態というのはまとわり付く。

主が意中の相手との時間に専念できるように努めるのは従者である者の責務。

そんな彼女の思考に気づいたのか、小倉は遠くを見ながらぼつりと一言。

「生徒会室に繋がる廊下は全てしばらくの間、封鎖したから心配ないぞ」

「は？」

「ワックスがけの下見のため、ってことで誰も入ってこれないようにした」

「そんなの先生が見たらバレるに決まってるし」

ワックスがけは然るべき道具、然るべき計画を立てて初めて行われる行為である。一箇所程度ならまだしも、廊下全ては流石に先生たちも不審に思うことであろう。

リスクのあることである。それに対しての小倉のコメントは極めて軽かった。

「そうしたら誰かの悪戯って事で有耶無耶にするよ。要はかぐや様の時間が稼げれば良いんだし」

「……ほんつとうにアンタのやり方はスマートじゃない」

「たまにぴっちりスーツで夜に出回るお前のほうがスマートじゃないと思うけどな。いや、どちらかというの良い感じにボディライン見えるから別にスマートじゃなくても

……痛った!!」

SUNGEER  
スネ蹴り。

古より古く伝わる一撃必殺技の名前である。

皆様は経験はあるだろうか。転んでスネをぶつける、ということが。この痛みは今の世界のどの文豪の筆を以てしても記しきれないほどのものであり、悶え苦しむことこそが作法とも言える。

そのような伝家の宝刀を食らった小倉が涙目になるのも、必然であろう。

「ん」

うずくまる小倉へ向け、手を伸ばす早坂。対する彼はその手へ自分の手を乗せる。

「うわ、柔らかか。あつたか」

「誰がお手しろと言ったし! ……その先生の書類はどこにあるの? 私が代わりに渡してあげるから」

「あ、そう? それは助かるわー。この後、いつもの手紙の仕分けやらなきやならないからさっさと帰りたいかったんだよな」

四宮家にやってくる無数のご機嫌伺いの手紙。取るに足らないものでも、それに丁寧に返信してこそその『格』。その返信内容の草案作成が許されているのは早坂と小倉の2名。

今月は小倉の担当であった。

小倉としてもさっさと帰りたかったので、二つ返事で早坂の申し出を受けることにした。

「これと、これと、これ。あ、これは確か2枚目にも会長印を押さなきゃならんらしいから言っといてくれ」

「了解。ん、これは？」

クシャ、と紙では鳴りようなない音がした。

渡された書類の真ん中辺りを見てみると、某携帯食であるカロリーフレンズが挟まっていた。味は早坂の好きなメープル味。

その意味を計りかねていると、小倉がバツが悪そうに答える。

「あー……お前、この後もかぐや様に付くから飯食えないだろうと思つてな」

「……」

「まあ、いらなかつたらテキトーな奴にでもあげてくれ。藤原ちゃんなんかめっちゃ喜びそうな気がする」

「……………」

「黙ってられるのも辛いものがあるな。じゃあ俺は行くから。倒れないようになー」

小倉の後ろ姿が見えなくなった後、早坂は再び生徒会室まで戻り、何かトラブルが起きていないか確認する。ポケットから取り出した聴診器を扉に当てると、生徒会室内では四宮は声を荒げ、白銀が狼狽えていた。

今日も失敗したのだな、と確認すると早坂は生徒会室に向かって歩いてくる石上へ目をやる。

「やつほく会計くん。ごめんだけどこれ会長さんに渡してほしいし〜」

「はあ……分かりました」

「お願いだし〜!」

ここでの役目は果たしたので次の仕事のために思考を切り替える。

その前に、左手に握っていたカロリーフレンズへと視線を落とす。次に周りを確認した。誰もいない。

「んむ」

一口食す。このわざとらしいメープル味が好きなのだ。疲れた体に甘みが染み渡る。

「全く小倉の奴——」

嫌でも小倉の顔が浮かんでしまう。ぶんぶん頭を動かし、すぐさまそれを振り払

う。

「——いっつも私の気を散らせてくる」

もし四宮かぐやがその時の早坂を見たらこう言うだろう。

「あら早坂、どうしたの？　口元が緩んでいるわよ」、と。

「あー……もうっ、さっさと仕事に戻ろう」

この物語は、白銀御行と四宮かぐやの恋愛頭脳戦ではない。

これは、四宮かぐやの侍女にして親友とも言える少女——早坂愛が最も憎み、そして最も気を取られた男との恋愛伯仲戦である。

本日の勝敗——早坂の敗北。



## 第2話 小倉次郎は楽しみたい

四宮別邸における早坂愛の業務は多岐に渡る。

その中でも最も難易度が高いのは使用人たちの監督と言えよう。他者に物を頼む分、その仕事の完成度はその者次第。

それを早坂愛というフィルターに通して、主人の目に触れさせて良いかどうかが決定される。

無論、それだけにしくじればその作業を行った他者の首は飛び、監督をした早坂も責任を取らなければならない。

(今日は綺麗好きで有名な貿易会社の社長が来るはず。掃除は特に念入りにしなくては)

使用人たちと簡単に朝の打ち合わせを行い、それぞれの持場へと行かせる。

その中に1人、お仕着せの服装を身に纏う早坂と同年代の少年がいた。

「小倉、ちよつと待って」

「ん？ 何だよ早坂」

小倉次郎。

肩まで伸びた髪を後ろで束ねているまでは同じだが、今日は縁無し眼鏡を着用していなかった。

これが彼の本来の姿である。なるべく地味に、そして目立たずに。空気に溶け込むようにして男子たちから情報を収集しているのだ。

そこにはもちろん、主人である四宮かぐやの周囲に起こりうるトラブルへの対応も業務として入っている。

「止まって。じつとして、動くな」

「何だよ……つと」

そこで小倉は固まる。

早坂が近づき、細い手を伸ばしてきたのだ。陶器のような肌だ。日頃の激務の中でもメンテナンスは怠っていないことの証左である。

(ち、近い)

超が付くほどの美少女であろう早坂から近づかれて悪い気はしない。ほんのりいい香りもする。いつもシャワーを浴びているはずなので、それであろう。

時間にして数瞬。

気づけば、小倉は少し喉元が息苦しくなったような気がした。

「アンタ、ネクタイ曲がってた。かぐや様か他の使用人に見られたら分かってるんで

しようね」

「こんな有象無象の俺に目をつけるとは思えないけどな……ぐえっ」

「つける。使用人のレベルは主人のレベル。アンタのだらしなさはそのままかぐや様のだらしなさになるんだから」

「ギブ……ギブ……」

睨まれながらネクタイで首を締められるという漫画でしか見ないような事をされ、小倉は少量の感動と多量な命の危険を感じていた。

開放された小倉は新鮮な空気をたつぷりと吸い込み、反省を文字通り身に刻ませると、屋敷の清掃へ向かう。

「待って。小倉、今日アンタは昼食と夜食の仕込みの応援って伝えているはずなんだけど」

呼び止め、そう言うのと、彼はあっさりとこう返した。

「それはもう終わらせた」

「へ？」

「料理長とも打ち合わせは済んでるから後はスタッフに任せれば良いだけにしてある」

「今回は食材の量が沢山だからそんなすぐに終わる訳無い」

「すぐに確認してみるか？」

そこで早坂は「この後の打ち合わせで確認する」とだけ言つて、終わらせた。彼女は分かつていた。

こと、小倉次郎という人間は仕事に対しては絶対に嘘は吐かない。だから、早坂は必要以上に問い詰めることはしなかつたのだ。

「それならエントランスホールをお願い。今日の来客は——」

「綺麗好きで有名な社長さんだろ？ 了解〜」

そう言つて、小倉は早坂と別れ、目的地へと歩を進める。

その道中、他の使用人たちと挨拶を交わしては簡単な雑談を行う。この一見、小倉がサボっていると疑われかねない行動をしているのにも、彼なりの理由があつた。

「小倉さん、少し良いですか？」

「ん？ 何ですか？」

女性使用人が困つた顔で声をかけてきた。

小倉はにこやかな笑顔で応対する。彼が砕けた物言いをするのは同年代である早坂愛ただ一人である。

「2階ベランダの手すりの汚れがどうしても取れなくて……どうしたら良いでしょうか？」

「汚れ……それはどういった類の汚れですか？」

女性使用人から汚れの種類を聞き、何となくアタリを付け、適切な洗剤と清掃方法を教えてやると彼女はお礼を述べ、去っていった。

その後、すぐに他の使用人がやってきて、相談を持ちかけられる。

小倉がエントランスホールにたどり着いたのは4名の悩み事を解決した後だった。

「やった」

時間を確認すると、あまり余裕がない。彼は掃除道具を手に、同じく掃除をする使用人たちの中へと入っていった。



朝の必要業務をこなした早坂と小倉は使用人らの休憩室で朝食を取っていた。

今日の朝食はサンドウィッチ。早坂のお手製である。

何がキツカケで始まったのか2人はもう忘れてしまったが、交代で朝食を作り、そして一緒に食べていた。

「でさー早坂、高井の奴が遊びで始めた株がなんと大当たり。父さんの会社の一つを分けてもらって経営の道も考えるかなーだっさ」

「時間無いから黙って食べる。小倉これで何度遅刻しそうになっているか覚えてる？」

「はいはい……同い年で何年も一緒に働いている腐れ縁みたいな奴との楽しい食事時間すら俺には与えられませんよーだ。お、このハムサンド美味しい。これ良いハム使ってるねえ」

数個ある中から小倉はハムサンドを手に取り、食していた。パンは絹のように柔らかく、ハムは噛みしめるたびに旨味が滲み、一緒に挟まれたレタスが爽快な食感を生み出す。

まさに芸術品とも言える。

小倉の手放しの称賛を受けて、悪い気はしなかつた早坂は黙ってたまごサンドを口に運んだ。

「さて、と今日も早坂が先に登校で、俺が後からだつたよな。気になった箇所の点検をしつてから行きますかねえ」

(これで少しでもぐーたらしてくれてたら私もここまで苛立たなくて済むのに)

彼女の目から見て、小倉はだらしなさと軽薄さの権化とも言える人間であった。

普通ならそんな奴がいたらどんな手を使ってでもこの屋敷から追い出しているところだ。

だが、小倉はただの一度も手を抜いたことはない。

清掃、料理、庭の管理、その他雑務。

それらの仕事の完成度たるや、使用人の仕切りを任せられている早坂さえ凌駕していることもあった。

故に、苛立つ。

ライバル心、とでも言うのだろうか。それを抱いているからこそ彼女は常日頃から厳しい態度を取っている。

その少し後ろめたい感情が根底にあるからこそ、早坂はこう願っていた。

——避けてくれれば良いのに。

早坂愛は、小倉次郎に避けられたいのだ。

「あ、そろそろ時間じゃないのか早坂？」

「ん」

身だしなみを再確認し、鞆を手に持った早坂を見ながら小倉はぼつりと一人言つ。

「お互い学校は楽しもーぜ。俺たちの年代にとっちゃそれが当たり前らしいからさ」

彼女はそれに対して答えなかった。少しだけ複雑そうな表情を浮かべる彼を見てみると、まるで自分を見ているような感覚に陥りそうになるのだ。

答えなかった代わりに、彼女は冷蔵庫を指差した。

「入ってるから」

「……何が？」

それで察してくれなかったので、早坂は少しだけ頬を染めながら、今度ははつきりと大きな声で言った。

「昼食用のサンドウィッチ、そこに入ってるから！ どうせまたお昼は何も食べず水だけで済ますつもりなんでしょう！ そんな貧民みたいなことされていると私が恥ずかしくなるから！ それ食べて！」

「お、おーい！ 早坂あ！ おい！ うわまじかよそのまま行っちゃまった……」

何か余計なことでも言ったのだろうかと少しだけ振り返ってみたが、何も言っていないと自信が持てただけに、更に彼は混乱した。

「どうして、いきなりサンドウィッチなんか……いや嬉しいんだけどさ。どういう風の吹き回しだ……？ 俺、何か言ったかな……？ ただ昨日、会話の中で昼に食べるサンドウィッチつてめっちゃ美味しいよなあ！ つて一瞬話したくらいだぞ……？ まさか……」

そこでようやく得心いったとばかりに小倉は手を叩いた。

「ああ、そっか！ 多分、俺が勝手に材料使うと思って先手を打ったのか！」



オタンコナス  
鈍感。

これが国語のテストならば間違いない赤点である。

長年一緒にいるせいかな、そういった繊細な心の機微が読み取れずにいるのが、小倉次郎が小倉次郎たる所以。

何気なく冷蔵庫を開け、包みに入ったサンドウィッチを手に取ると、そこには小倉の好物であるハムサンドが収まっていた。それだけではない。

「これはチキンカツサンド、それに俺の好物の更に好物のハムエッグサンド！ すごい！ めっちゃ美味そう！」

そこで小倉、何気に自分の胸に手をやった。そして、首をかしげる。

「何で心拍数上がってるんだ俺？ 運動不足？」

考えてみるもさっぱり見当がつかない。そういつた事はすっぱりと忘れ、切り替えることが肝要だということではそこで考えるのを止めた。

「まあ、でも」

これだけははっきりと思っていた。

「今日のお昼、めっちゃ楽しみになってくるじゃないか」

本日の勝敗——早坂の勝利。

### 第3話 小倉次郎は話したい

私立・秀知院学園。

あらゆる界限で有名な組織の子どもがひしめく魔境である。将来の日本を担う若者たちただけあり、その面構えは凡人とは全く違う。

そんなエリートたちを束ねる集団がいた。

生徒会。

この学園の自由で、しかし責任を伴う校風を守護するべく存在。

それだけにそのトップに立つ者には非常に高い能力が求められている。

エリートを束ねるに値する人物。口で言うのは簡単だが、そう容易くは現れない人材である。

そう、普通は思うであろう。

「さて、と次の授業が終われば昼食か」

いるのである。

白銀御行。

現私立・秀知院学園生徒会会長である彼は全校生徒の出すハードルを飛び越え、エ

リートたちを掌握していた。その最大にして最強、唯一の武器は『勉強』だった。

武器を研ぎ続けてきた白銀は根を詰め過ぎているとか既にそういう次元の話ではなく、いつどこでぷつぷつり糸が切れてしまってもおかしくはないのだ。

疲れは目に現れ、そして近寄りが見たい雰囲気醸し出している。

そんな彼に、近寄る者が1人。

「お疲れ様、白銀会長」

「うん？ 小倉か」

小倉次郎であった。四宮かぐやに仕える使用人として、可能な限りの情報収集に努めるのもまた仕事の一種なのである。

「どうした、神妙そうな顔で話しかけてくるなんて……もしや？」

「いやあ、またちょっといいバイトを紹介してもらえないかなあと思いました」

その瞬間、白銀の目の色が変わる。

決して裕福な家の生まれとは言えない彼は常日頃からアルバイトに勤しんでいた。勉強するにも金がかかる。特にシャープペンシルの芯などの消耗品の消費が異常なため、自らの手で稼ぐしか無いのだ。

そのため、白銀は常に一定量バイトを入れていなければ安心できない生粋のアルバイト戦士と化しているのであった。

「お前も今月は厳しいのか」

「ええ、勉強道具をそろそろ更新しないとヤバいんですが、そうすると……つて感じで」  
四宮の別邸で住み込みで働く小倉は給金を貯金していた。必要な時に、必要な額を下ろすだけ。

そんなにお金には困っていないからこそ彼は、ごくたまにアルバイトをすることがあった。

学校、四宮の別邸の2つの世界だけで生きている自分だからこそ、たまにでも外の世界に触れることで認識や価値観が凝り固まらないようにしているのだ。

「うむ、相変わらずお前も苦労しているようだな。分かった。アルバイトならば俺に任せておけ。近いうちにいくつか見繕ってきてやろう」

「ありがとうございます白銀会長！」

そう言った事含め、最初は情報収集がてら白銀に近づいただけに過ぎなかった。何か主人の土産話になりそうな話でも聞ければ重畳。その程度。

だが、中々どうして。とても話が合う。願わくばこんな汚い下心を含めて接触したくなかったと、小倉は思ってしまったくらいには。

「ところで小倉、お前は確か帰宅部だったよな？」

「え、はい。そうですね」

「そうだよな。ふむ……」

じっと見つめる白銀。対する小倉は少しだけ緊張していた。

（まさか、俺がただの生徒じゃないってことがバレてる……?）

白銀は間違いなく優秀だ。そんな彼がどうでも良いような日常の情報の中から小倉の真実を導き出そうものなら、実に容易く暴かれてしまうだろう。

そんな懸念を抱かれていることなど知らぬ白銀は決意したように頷いた。

「小倉。昼休憩の時、ちよつと時間をもらえないだろうか?」

「良いですよ? あ、でも弁当食べてからでも良いですかね?」

「勿論だ。何なら生徒会室を使ってくれ。俺もそこで食う予定だ」

「うえっ!？」

「ここで思わず声をあげてしまった。もつと良く聞けば良かったと自分の判断ミスを呪う。」

「どうした? 何か問題が?」

「な、何も無いです。はい、何も、無いです」

「なら良かった。そろそろ鐘が鳴る。授業が終わったら一緒に行きよう」

「……了解です」

四宮かぐやから下されている言いつけがいくつかある。

その中でも、特に守ることを課せられている言いつけが1つだけ。

「小倉くん、生徒会室には絶対に来ないでくださいね。もし来たら……その時は、分かりますね？」

四宮かぐやは白銀御行の事が好き、というのは小倉も知っていた。だからこそ、彼女がそこまでキツク言う理由も想像がつく。

（万が一にでも、俺とかぐや様の関係を勘付かれてしまえば致命的だもんなあ。分かる分かる）

相当ヤバい出来事になりそうな予感がムクムクと湧いてくるが、ここまで来てしまえばもう断れない。むしろそうすることによって不信感を抱かれ、今後の関係に影響してくるのは間違いない。

小倉は授業中、現実逃避とばかりに、今日の昼食である早坂のサンドウィッチの事を考えていた。



授業が終わり、今すぐにでも逃げたかったがわざわざ白銀から迎えに来てもらっては、その選択肢は一瞬で消えてしまうのは当然といえよう。

生徒会室へ向かう道中、白銀は小倉に言った。

「すまないな小倉、わざわざ足を運んでもらって」

「いえいえ。それで、俺に何の用なんですか？」

「なに、最近帰宅部が増えてきているようだな。部活動を強制させる、という訳ではないのだがやはり少し気になる。部自体に問題があるのか、それとも家庭の事情なのか、もしくははまた別の問題なのか……とかな」

「まあ帰宅部が増えていてるってことは部を辞めたってことですからね」

「そういうことで、生徒会は近々意識調査を行おうかと考えている。それには調査用紙が必要だ。ここまで言えば分かるか？」

小倉は頷いた。となると、今日限りで終わるかどうかが怪しくなってきたな、と彼は少しだけ冷や汗をかく。

「早い話が調査用紙を作成するための意見出ですかね？ 俺、帰宅部だし」

「その通り。今回のターゲットは帰宅部だ。そうなる、こちらとしては同じ立場の人間の意見を事前に聞いておきたい。この聞き方では回答しづらいか、とかこれは把握しておいた方が良くはないか、とかな」

「趣旨は理解しました。もちろん喜んで協力させていただきます……とは言っても、俺こそ元々帰宅部だったのでどこまで白銀会長の参考になるか分かりませんがね」

「それで良い。助かる」

もう少しで生徒会室へ続く一本道の廊下へ出る。その直前、小倉は背後から強烈な悪寒を感じた。

振り向いては駄目だと心の中でもう一人の自分がガンガン警鐘を鳴らす、それでも振り向かざるを得なかった。絶対に後悔することが目に見えていたから。

「あれ……？ 会長と小倉くん？ 何してるし……？☆」

このセリフに星が付きそうなくらいにきやぴきやぴした声を聞いた瞬間、小倉は1回目のゲームオーバーを迎えていた。決して気取られず、振り向くとそこにはよく知るサイドポニーが。

「ん？ お前は確か……」

「も……会長さんひどいし……。早坂！ 早坂愛だし！」

「ああ、そうか早坂だったな。こんな所で会うなんて珍しいな」

このあまりに高い変装<sup>社交性</sup>ふりに思わず吹き出しそうになった。なんせ、小倉が知っている早坂はいつもドスを利かせた喋り方しかしていないだけに、そのギャップの破壊力たるや。



「ちよつと友達と内緒の話してた所〜！ そ・れ・に・し・て・も」

「ここにこことした愛嬌ある笑顔を浮かべたまま、早坂は言う。

「二人こそどこ行くつもりだったし〜？ この先なら生徒会室だよ〜？」

「ああ、そうだ。ちよつと小倉に頼みたいことがあつてな」

「そうですよ。いやあ、生徒会室つて普段入らないからとても楽しみだなあ！ あつはつはつはつ〜！」

「そうだったんだ〜！ 小倉くん会長たちと協力してあげなよ〜！」

そう言いながら早坂は目をパチパチと動かす。視線の先には勿論小倉。そして、このアイ・コンタクトの意味を彼は頭の中で言語化して受け取っていた。意味するところはこうだ。

「ア ト デ シ ッ カ リ ハ ナ シ ヲ キ カ セ ロ」。

「もちろんですとも！ 白銀会長には普段からお世話になつてから誠心誠意協力させていただけますよ〜！」

「じゃあウチ、これから友達の所に戻るから〜！ ばいばい会長に小・倉・く・ん！」  
小倉は涙目になつていた。この先の生徒会室への廊下が断頭台への道に見えるような気がするの、絶対に気のせいではないであろう。

## 第4話 早坂愛は言い返せない

「よし、こんな所か」

「お疲れさまでした」

時間にして20分、といったところであろうか。白銀が資料を纏め始めたところで、彼からの頼まれごとは終了した。

「助かったよ小倉。おかげでポイントを押しえた調査が出来そうだ」

「いえいえ、白銀会長の叩き台が良かったからですよ」

弁当を食べた後、すぐに帰宅部に対する意識調査の調査票精査が始まった。

形式としてはまずざっと見てもらい、白銀が1問1問丁寧に小倉へ確認していくというもの。

そういった流れだったので特に小倉は身構えることなく、精査に取り組めた。人の上に立つ人間というものは、こういった細かなやり取りにその『格』が透けて見えてくる。

そういった点で言えば、白銀はパーフェクト。生徒会長だからと傲慢になることもなく、あくまでお願いをしている立場だということを良く理解している聞き方であった。

「せっかくだ。コーヒーでも飲んでいくか？」

「え、良いんですか?」

「ああ、俺も飲むからそのついでだ。いつもこの時間飲んでいてな。飲まん調子が狂ってしまふ」

「そういうことならご相伴に預かります」

そう言うと、白銀は領き、早速コーヒを淹れる準備に取り掛かった。

手持ち無沙汰だったので、手伝いを申し出るも、「客人は座っていてくれ」と返されたので小倉はお言葉に甘えることにした。

彼は職業柄、コーヒを淹れる立場のため、こうして誰かにされるのがたまらなくむず痒かった。何だかこう、ソワソワする。

(会長もこなれてるなあ)

ぼーっと小倉は白銀の様子を見る。

手付きはやはり素人だ。しかし、それを補って余りあるほど豆が良いのか香りはまずまず。

流石天下の秀知院学園、といったところであろうか。こういった所にも質を求めているのだろう。

「待たせたな」

「ありがとうございます」

温かいうちにまずは一口。味、香り、やはり良い豆を使っていた。これは何だろうかと思いついている間に白銀が話しかけてきた。

「どうだ？　と言つても、恥ずかしながら俺は素人だな。もしかしたら口に合わんかもしれないがそうだったら謝っておく」

「いえいえ！　とても美味しいです。白銀会長は何かコーヒーについて勉強を？」

「いいや。ただカフェインを摂ると頭が冴えるのでしたらだと飲んでいるだけだ……とは言え。折角なら美味しいコーヒーを飲みたいだろう？　それでほんの少し書物をかじってみた程度に過ぎん。勉強だなんて、とてもじゃないと言えんよ」

「だったら鍛えればまだまだ上達しそうですねー」

「ははは。褒めても何も出んぞ……と、言いたい所だが」

立ち上がり、白銀が自分の机の引き出しから何かを取り出してきた。

「いつもなら何も出なかつたが、今日はこのどら焼きをプレゼントしてやろう」

「こ、これは！」

包みを見て、即座に小倉はそのどら焼きがどんな代物か気づいた。

「日本3大どら焼きの中でも頂点に君臨する老舗、『たぬき屋』のどら焼き……だと?」

「流石、お目が高いな」

「どれだけ大量に作つても30分で売り切れるという『お化けどら焼き』じゃないです

か……。どうやって手に入れたんですか？」

「ああ、ちよつと食には異常なほど執着が強いウチのメンバーが——」

そこで開かれる扉！

その先に立つ者を見た小倉は出来ることなら一刻も早くその場を離れたい気持ちでいっぱいになる！

「あれえ？ 会長と……えつと」

「初めまして。小倉次郎と申します」

「あ、一緒のクラスの小倉くんですか！ 私は藤原千花つて言います！ よろしくお願  
いします！」

そう言つて、ゆるふわ巨乳少女・藤原千花は人懐っこい笑みを浮かべた。

対する小倉も笑顔で返す。

彼の言葉に嘘はなかった。ただし、秀知院学<sub>こ</sub>園では“という枕詞を使つていなかった  
ただけで。

小倉次郎は藤原をよく知っていた。あの四宮かぐやの厳しい試練をあつさりと乗り  
越え、友人関係になれた剛の者。

当時、その話を聞いた時、小倉は「今、宝くじを買えば大当たりするんじゃないかね？」と  
いう事を考えたくらいには驚天動地の出来事であった。

だからとても印象に残っている。人間性といい、やらかすことといい。

「あーっ！ 会長それえ！」

「ああ、藤原書記から貰ったものだ。何だか勿体なくてな。取っておいてしまったんだ」「えーっ！ 何で食べてないんですかあ!?! とつても美味しいですよ！」

「だからその小倉と半分で食おうと思っていた」

瞬間、藤原の思考回路がフル稼働する！

たぬき屋のどら焼きは藤原千花といえど、そう簡単に手に入るものではないのだ。取り置きNG、買い占めNGなど彼女が思いつくあらゆる手は“出入り禁止”という一言で終わってしまう。

店主が絶対に権力に屈しないこともあり、安定確保が難しい、彼女を以てしても現代の宝と呼ぶべき逸品。

それが今、半分で自分を差し置いて食べられそうな事態に、彼女は脳細胞レベルで覚醒する。

「小倉くん！ 私とババ抜きで勝負しましょう！」

そこで藤原千歌、さながら刀を抜き放つが如く、トランプを懐から取り出した！

その眼には決して逃げることは許さぬとばかりの炎を燃やし。

「ババ抜き、ですか？」

「はい！ それで私が勝ったらそのどら焼きは3等分にしましょう！」

「藤原書記、それは流石に意地汚い気が……」

白銀が明らかにヒイていることが分かつてても退かないのが藤原である。というより、彼女も自分の言っていることがよく分かつているのか半泣きで反論した。

「だつてえ！ 私もそのどら焼き食べたいんですもん！ 知つてますか会長!? そのどら焼き、ちょ~~~~~~~~手に入りにくいんですよ!」

「お前という奴は……」

「さあやりましたよう小倉くん！ 会長は放つておいて！」

「いや、じゃあ僕はいららないんで代わりに藤原さんが……」

「それじゃあ私、ただただ食い意地が張つてゐるって思われてしまふんですよ！ お願  
いだから戦つてくださあい！」

この話を持ちかけた時点で既に食い意地が張つていゝのでは、と喉元どころか既に舌の上まで来ていたが小倉は何とか飲み込んだ。

彼は白銀へ視線を送った。

すると、白銀は諦めたように首を横に振る。

(ああ、これももうババ抜きやらないと気が済まないやつなんですな)  
面倒臭い。

あろうことに、この状況を作り出しているのがたつた一人だという現実には軽く身震いしながらも、小倉は覚悟を決める。

右手を握つては開き、握つては開き。準備は整った。

「良いですよ。やりましょう藤原さん」

「良いんですかあ!?! じゃあやりましょう!」

「ええ、良いですよ。ですが俺——」

後から白銀は、その時の小倉の表情はしばらく忘れられないだろうと、振り返った。何せ彼は、それはとてもとても邪悪な笑顔を浮かべていたのだから。

「——こういつた賭けババ抜きで負けたこと、たったの一度も無いですよ?」



「それで、結局俺が勝利。藤原ちゃんが食い下がってきたけど全勝っていう訳。どう? 俺すごくくない?」



「どーセイカサマでしょ？ 何だかんだ勝負強そうな書紀ちゃんがそんなに負ける訳ない」

「いやいやほんとだつて。俺、昔からババ抜きだけはマジで負けたことないから得意げな小倉、対する早坂はジトーつとした視線を送るだけであつた。」

2人にとっては“いつもの場所”である使用人たちの休憩室で軽い夕食を取りながら、小倉は今日の出来事を報告していた。

元々、早坂から白銀と何を話したか報告する<sup>お願い</sup>脅しを受けていたので、逃げるわけにはいかなかった。

「それにしても、アンタが余計なことを言っていないくて安心したつて一応言っておく？」  
「俺を誰だと思ってるんだよ」

「軽薄クソむつつり猿」  
「オツケー。どうやらお前の頭にはカフエインが足りてないらしいな？ 今なら樽でぶっかけてやるがどうする？」

「かぐや様へ、小倉にいじめられたつて言う」

「まじですいませんでした。俺が人間のクズです」

早坂にとっては冗談かもしれないが、本当にやられたら比喻表現抜きで消される未来しか見えなかった彼は額をテーブルへ擦り合わせる。

プライドなんてクソツタレ。生きてることこそが素晴らしいのだ。

「あ、ところで早坂」

「何？」

「今日用意してくれた昼のサンドウィッチ、美味かったよ。ありがとうな」

「——っ」

プイ、と早坂はいきなりそっぽを向いたので、小倉は冷や汗が吹き出ていた。

何かマズイことを言ってしまったのだろうか。言ってしまったのなら、恐らく自分に明日が無いことが確定する。

怯えながら小倉は早坂を見る。彼女はどこか遠くを見るようにしながら、一度大きく深呼吸をした。

「……本当に？」

「何が？」

「本当に、美味しかった？」

彼女にしては珍しく、どこか自信なさげに時々視線を空中に彷徨わせながら、念を押してくる。

普通の男子高校生ならばそこで理性を失ってしまうほど、どこか早坂に“か弱さ”が滲み出ていた。ただでさえ美少女、これにはもはやときめくという方が無理な話。

しかし、そこでその「か弱さ」を鋭敏に感じ取れない思考停止野郎こそが小倉次郎なのであった。

「当たり前だろ。お前の料理なら無限に食えるぜ！　って感じ」

そこで早坂、立ち上がる。

本格的に怒らせてしまったのか、と小倉が身構えていると、彼女は聞こえるか聞こえないかといったくらいの声量でぼそりと一言呟いた。

「——ほんつとアンタ、キライ。ダイキライ」

小倉が引き止める前に、早坂は部屋を飛び出していった。

彼はしくじった、という気持ちと「何だか耳が赤かったような？」という気持ちの2つを背負っていた。

彼女にしては珍しい、不可解な奇行。ずっと彼女と居た小倉にはそれくらいにしか映らなかつた。

「何なんだ……っ？」

誰も答えてくれないのは分かっていたが、それでも一人言ちずにはいられない。

「ええ、何なんでしょうね？　早坂があんなに取り乱すだなんて。これは、昼間の件と一緒にはじつくりと聞かせていただきたい所ね——小倉」

全身が凍てつくかのような圧倒的覇氣!!!

こんな覇氣が出せるのは世界でもこのお方だけだろう。

「こゝ、こゝんな所に珍しいですねえ、かぐや様」

小倉次郎にとって仕えるべき主・四宮かぐやは、それはそれはとても慈愛に満ち溢れる微笑を浮かべていたそう。

本日の勝敗——小倉の完全敗北。

## 第5話 四宮かぐやは問い詰めたい

突然の四宮の来訪！

心臓が止まりそうになる小倉！

出来得る限り自然にその場を離れようとしたが、上手く扉の前に位置取られてしまい、逃走は許されない！

さながら敗戦した軍隊を取り囲み各個殲滅するかのごとく鬼畜具合。

小倉は深呼吸をする。臆せば負けである。ましてやこの四宮かぐやの前ならば尚更である。

「きよ、きよきよきよきよ今日の昼の件とは一体何のことですか？ 俺って昼休みという概念がないので、ちよつと言っている意味が……」

まずはジャブ。とぼけることでこの事態を上手くはぐらかせるか試みることにした。

「今日、会長と一緒に入りましたよね？ 生徒会室に」

だが、四宮かぐやによる電光石火のカウンター！

これがリングの上ならば、既に沈んでいたかもしれない鋭く強烈な一撃。

終われない。ここで、終わるわけにはいかない。

「一体誰がそんなことを！俺があのだ下の白銀会長と生徒会室に入るだなんてそんな馬鹿な話、一体誰が？かぐや様、もしかして踊らされているのでは……」

「早坂から聞きました」

「弁明の時間を頂けないでしょうか我が偉大なご主人かぐや様」

刹那、小倉は額を地面に擦りつけた。それはそれは綺麗な土下座であったそんな。

嫌な予感がしていたが、ここは賭けであった。例え、早坂の名前が出された時点で土下座しようと最初から決めていたとしても、である。

「顔を上げなさい」

「ういっす」

無言で続きを促されたので、小倉は先程早坂へした話をもうちよつと丁寧に補足し、説明を行った。

それを聞いた四宮、形の良い顎に細い指を当てる。

「なるほど、会長が帰宅部である小倉に……」

四宮は頭の中で自分の把握している情報と、小倉が述べた説明との擦り合わせを瞬時に行い、とりあえず嘘は言っていないことを認めた。これで適当に言い訳をしようものなら、給料一部カットで対応しようと思っていが、それは一旦取り下げる。

同時に、彼女の頭の中ではまるでパズルを組み立てるかのごとく、カシャカシャと動

いていた。

「小倉、貴方つてどれくらい会長と仲いいの？」

「俺ですか？」

「ええ、会長はいくら悩んでいるからと言って適当な人間に声を掛けたりはしないわ」

四宮の知っている限りの白銀像だけで話をするならば、白銀御行はいくら困っているからといって、その辺にいる適当な人間には声を掛けない。それをするくらいなら自分が死ぬ気で頭を捻るのだと知っているから。

だが、今回のケースはそれをしなかつた。

となれば、それだけ親しいし、信用をしているのだと導き出すのは当然の帰結。

（早坂とは違い、男性だからこそ得られる情報というものがある……私としたことが、こんなにも簡単な事に気づかなかつたなんて）

瞬時に組み立てられる打算。

早坂だけに頼ってきた情報網が更に広がることで、白銀御行に告白をさせるといふ詰将棋をまた一手進めることが出来る。

そんな彼女の思考に気づく様子もなく、小倉はこう返した。

「割と仲良いっすね。つてか、あの人に声かける人あんまりいないから、そういうのもあつて親しく思つてくれてるんじゃないんですかね？」

「へえ……」

「まあそういう点でいけば、精神的ボツチのかぐや様と相性良いんじゃないっすかね？  
あつはつはつは！」

瞬間、全身が強張った。具体的には、凍てつくような眼の四宮が小倉のネクタイをねじりあげていたからである。

「私、正直な人は好きよ？　こういうことをしたくなるぐらいにはね」

「ギブ……死ぬ……ギブ……」

一体どこでこのような技を覚えてくるのだろうか。これほどまでに的確に、効率よく締め上げてくる人間が現代の世にいてたまるか。やっていることと眼だけ見れば、まるで稀代の暗殺者と対峙しているかのような感覚になっていた。

「良いですか小倉。たまに言っていますが、私は貴方の首をいつでも飛ばせるということとは、覚えていますよね？」

「あ、ははは……社会的になのか肉体的なのかまるで判断つかねーっすね」

「軽口を叩く相手は選ぶことね、そしてあまり生徒会室には近寄らないで。もし私と貴方の関係が勘付かれれば、分かるわよね？」

そう言って解放された小倉はすぐに酸素を取り込む。

「そうだと思います……だけど、俺はあると思いますけどね。リスクを背負わなければ勝



ち取れない情報……っつてやつが」

「ナンセンスね。そんな情報なんて無い」

「そうですかね？」

「ええ、必要なら必要な人材を雇えば良いだけの話よ。わざわざリスクを背負ってまで得られる情報があるならむしろ教えて欲しいぐらい——」

「意識調査の質問事項精査の時に俺、会長がかぐや様のことを普段どう思っているか聞いたんですよね」

「——人間、リスクを負わなければ勝ち取れないものがあるわ。情報もそうよ。リスクを背負ってこそ掴み取れる情報がこの世には無数に存在するのよ！」

一体、普段どんな食生活を送っていればこんなに鮮やかに立場を変えることが出来るのかと疑問に思ってしまう。



「なあ早坂、俺に言いたいことは無いか？」

「何の話だし〜? ☆」

翌日、学校の廊下で小倉は早坂をひっ捕まえ、誰も居ない廊下へと引つ張つてきた。にこやかに怒る小倉、にこやかに返すギャルモード早坂。

「いや、今誰もいないし。その猫かぶりしなくて良いから」

「ありがとうね小倉くん! 四宮さんにこっぴどく怒られたつて聞いたから今日のお昼のサンドウィッチとつても美味かつたし! ☆」

「オーケー。喧嘩売つてると見てよろしいですね?」

「結果的に四宮さんが見逃してくれたんだから結果おくらいい?」

「おくらいい? じゃねえ! おかげで今月の給料ヤバかつたらしいぞ俺! // 小倉は今月のお給料、別に90パーセントカットでも十分に生きることが出来ましたよね?」

「だつてよ! 実質死刑宣告だよこのやろう!」

「その時はウチが面倒見てやるのもやぶさかではなかつたし?」

「なんだその疑問形は! ……はあ、文句言つてたら何かスッキリしたわ」

早坂愛の作戦、成功である。

昔から小倉は、こうして口に出させることでガス抜きを完了するのだ。だからこそさういった事で拗れたことは一度もないのだ。

すつかり元の調子に戻つた彼は、早坂をじつと見る。

「どしたし?」

「……まあ、どこで誰が聞いてるか分からないからそれでも良いか。はあ、教室戻るわ俺」

そう言うと、小倉は背を向け、教室へ歩き出す。

彼も彼で、今この場に早坂と2人きりでいるというのは中々危ない行為であったのだ。

早坂はいわゆる陽キャたちの中、対して小倉は陰キャたちの中に溶け込むのが一番のカモフラージュとなつている。そんな相反する2人がこうして意味ありげに廊下にいるという噂が広まつてしまえば、非常に面倒くさいことになる。

リスクマネジメントを考慮するなら、そもそも屋敷の方で話をするべきだった。

頭に血が上つてしまつていたな、と少しだけ反省する小倉。

「……小倉」

唐突に聞き覚えのある声色。振り向くと、目つきが小倉のよく知る早坂になつていた。

首を傾げて次の言葉を待つと、早坂は視線を反らしながら、こう言った。

「さつきの、冗談じゃないから」

さつきの、とは何だろうかと少し固まると早坂は駆け足気味に小倉を横切つた。

声を掛けたが、あつという間に去っていくという最近良く受けるこの対応に彼は疑問符が浮かぶばかり。

「うん？ ……何だったんだ？ あいつつて基本、俺を茶化すことしか言わねーからどこの事か全く分からんな」

廊下を一人早歩きしていた早坂は自分の口の軽さに、恥ずかしさを感じていた。自分らしくないと、いつも思う。

彼、小倉次郎を目の当たりにすると、小倉次郎と会話をすると全部の調子が狂ってしまふ。

声が聞こえてきた。いつも早坂がつるんでいる女生徒2人の声である。

早坂はこめかみに人差し指を当て、心のスイッチを切り替える。いまから自分は彼女たちと馴染むための人格になるのだ。

切り替わる刹那——早坂は最後に自分の口から滑らせた言葉を一度だけ思い返した。

(その時はウチが面倒見てやるのもやぶさかではなかったし——ほんとだし)

本当に、調子を崩してくる男なのだ。今日の夜の賄いは、彼が嫌いな辛い料理にして

やろうと、そう彼女は心に決めた。

本日の勝敗——早坂の勝利。

## 第6話 早坂愛はかばいたい

夜、四宮かぐやの私室をノックする者がいた。

中から四宮は入室を促すと、彼女の侍女である早坂が扉を開けた。

「来たわね早坂」

「はい、何でしょうかかぐや様」

呼び立てられたら即座に参上するのが仕える者としての矜持であり、前提条件である。

それを置いておいたとしても、早坂にとってはこの時間と――。

「ちよつとこつちに来て!」

「あ、今日も会長の話だな。それも長めの」と察することが出来るようになったのは一体いつからであろう。この主の、この主<sup>様</sup>にとっては有意義<sup>話</sup>な話は一体どのタイミングで始まったのだらうと彼女は段々と死んだ目になっていく。

今日、生徒会室であったことやそこで行った白銀との恋愛<sup>アホ</sup>頭脳<sup>勝負</sup>戦、そのおまけに少しだけ出てくる石上の話。

いつもいつもよくもまあ、それほどネタに溢れる日常が送れるものだど早坂はある意

味感心していた。

これが青春、というやつなのだろうか。

……ちなみに、ここまでの話で一切藤原の名前が出ていない。

安易に触れられる内容でもなかったもので、早坂は四宮が満足するまでの間、頭の中から綺麗サツパリ忘れることにした。

「ふふ……会長もそろそろ落ちる。そう思わない早坂!？」

「ええ……そうですね。何なら、さつさと押し倒しでもすればもつと早くくつつくと思えますよ」

「そんな慎みに欠ける真似が出来る訳ないでしょ！ そんなことをすれば——」

一応！ 一応、早坂の意見を頭の中でシミュレートしてみる四宮。

天才の脳細胞はフル活性し、数十、数百の押し倒し方法を思い描く。

だが、ことごとく顔が真っ赤になる未来しか視えない！

おまけに、妄想白銀は決まってこう言ってくるのだ。

『おやおや、あの頭のキレる四宮が思考を放棄してまで俺に飛びかかってきたかったのか？ ——お可愛い奴め』

「そんなの絶対にノーよ!!! そんな事をすれば四宮の生涯の恥になるわ!!!」

「現時点でかなり一生涯の恥を積み重ねている気がしますが」

「おだまりなさい早坂! ……ふう、喋ったら喉が乾いてしまったわ」

「どうぞ」

1つの間も置かず、早坂は四宮へミネラルウォーターを差し出していた。長年の主従関係が育んだ勘で、何となくそろそろ喉が乾きそうだといいことを察していたのだ。

「ありがとう。それにしても良く分かったわね」

「ええ、まあ。そろそろかなって思いました」

「良く私を見ていてくれることの証拠ね。……そういう話をするのならば、もう一人いたわね」

「もう一人?」

「小倉」

四宮は見逃さなかった。あの極めて沈着冷静な早坂の身体がちよっぴり強張ったのだ。偶然ではない、明らかに名前を出したからこの反応をしたのだ。

対する早坂は四宮が見抜いた反応を自覚していなかった。だから、彼女の目が一瞬きらりと光ったのかを察することが出来ずにいた。

「小倉がいかがなさいましたか? まさか、またかぐや様に粗相を?」



「いいえ。それに、小倉が私に軽口を叩いてくるのはいつもの事でしょう?」  
「そう、ですよね」

その早坂の反応に、四宮は少しだけ嗜虐心が湧いた。何せ、早坂の珍しい姿なのだ。少しくらいは堪能しても良いだろう、とそんな他愛もない理由である。

「——とはいえ、最近の彼は度が過ぎてているわね」

「え」

「早坂の目から見て、彼の仕事ぶりはどう見える?」

突然の質問。

その意図を掴みかねないまま、早坂は侍女として、即座に主の問いに答えるべく頭を回した。

「……私の目から見て、小倉の仕事は一流です。この四宮家別邸が常に最高の状態を保っているのは彼がいるというのも要因の1つだと思っています」

話している最中、彼女の頭には1つの可能性が過ぎよっていた。

小倉次郎の給料カット、いやそれで終わればまだ可愛い方だ。最悪の場合は——解雇。

最近、そのような話を小倉から聞いたばかりだからこそ、彼女はそんな“もしかしたら”を考えてしまう。

悪い考えは、更に悪い考えを呼ぶ。

(かぐや様は小倉の存在が目障りになった……?)

使える者は側に置き、そうでないと結論付けたら即座に切り離す。

そういう人間なのだ、四宮かぐやとは。これに関して、早坂はそこには十二分に理解を示している。だから今の主従関係があるのだ。

だが、小倉は？

「ですが、彼の、その、一流の仕事が出来ているのが少しだけ覆い隠されるくらいには、彼の言動が少しだけ目に余るのは確か……です」

その時の感情を、早坂は良く分かっていた。

主が黙って自分の話を聞いているのが何故か怖くて、そこで話すのを止めてしまえば何かを失ってしまいそうで。

知らない誰かと鬼ごっこをしているような、そんな奇妙な焦燥感が彼女の胸中をのたうち回っていた。

「だから、そういう所は私が指導していきますので、今回の所は小倉には寛大な処置を……お願いします」

気づけば頭を下げていた。何故、と早坂は自問する。

何故頭を下げるのだ。ここで悪く言ってしまうと、それで全てが終わるのだ。これで

自分の調子を狂わせる者がいなくなる。

そうしたら、もっと仕事の能率は上がる。もっと主のために尽くせる——はず、なのだ。

「……早坂」

ずっと沈黙していた四宮が口を開く。

そこから飛び出てくる言葉が一体何なのか、早坂は聞くのが少しだけ嫌だった。四宮かぐやの声帯が、振動する。

「ふ、ふ、ふ、ふ……！」

早坂は突然、四宮が笑ったことに困惑した。今の流れからの笑いに、理論的に納得できる要因を見いだせなかった早坂。

そんな彼女へ四宮は悪戯っぽく笑った。

「早坂。私、一言も小倉の事をどうしようだなんて言っていないわよ？」

「……は？」

笑いを堪えながら、四宮は続ける。

「私はただ小倉の仕事ぶりが気になったから聞いただけで、早坂が思っているような事

は考えていなかったわ」

「……………は？」

「ええ、そうね。小倉は有能だつていうことは私も良く知ってるわ。だから余程のことがなければ、別に解雇とかそんなのは考えていなかったわよ。最初から」

「それじゃ……………私は、もしかして」

やらかした！  
勘違い！

傍から見ると、そういうことだった。

「早坂、貴方気づいてた？ 私が小倉の名前を出した時からずっと強張ってたの」

「は？ は……………？」

事態をようやく飲み込めた早坂は、体温が急激に上昇しているのを感じていた。同時に今まで自分が述べた言葉が、自分の意図しない量で反響してくる。

「早坂の珍しい表情が見れて、楽しかったわ。ごめんね早坂」

それはとてもとてもいい笑顔だった四宮かぐや。

そんな彼女にとっては、些細な悪戯でも、早坂愛にとっては急所突きに等しい悪戯。

忠臣・早坂愛は天井を仰ぎ、大きく深呼吸。

そして、一言。

「私、しばらくかぐや様と口利きませんので」

マジギレ。

感情が爆発し、そして逆に穏やかになる現象。人間、究極の怒りを感じたら髪が金色になり、オーラを纏うことだってあるだろう。

早坂愛にとつては、今がその状況なのである！

いつもの500倍は礼儀正しいお辞儀をし、早坂は足早に部屋を去っていく。

「失礼します。かぐやお嬢様」

「ちよ、ちよーっ!! 早坂! 待ちなさい! ちよっと! ごめんなさい! 私が悪かったから! 早坂あ!」

その後はとても珍しい光景であった。

相当マズイ、と思ったのか四宮はすぐさま早坂に謝り倒した。

早坂にしても、そこまで深い謝罪を求めていた訳でもなかったもので、そこで手打ちとなる。

これで割と珍妙な一日は終わりを告げようと、していた。

「ん? 早坂? 珍しいなもう部屋に入ってる頃だろ」

廊下でばったりと出くわすは、件小倉次郎の人物。

お仕着せの服装、肩まで伸びた髪を後ろで束ねている姿はもはや見飽きた所ではない。

「小倉こそ何してるし」

「俺？ 俺は屋敷の見回りをしながら勉強して、ついでに明日の来客用のテーブルレイアウトを考えてた」

その言葉の証拠を見せるように、彼の手には参考書とテーブルの図面が握られていた。

「小倉って何時に寝て、何時に起きてるんだっけ？」

「俺か？ うーん、まあ色々勉強したいことがあるから4時に寝て5時かな？ 流石に

30分は身体に堪えるから最低1時間は寝るようにしてる」

「……そういう所をもっとかぐや様にアピールしようとは思わないの？」

「無いなあ。仕事している連中が分かってくれてたらそれでいいいな。それに別にかぐや様に認めてもらわんでも——」

そこまで言つて、小倉は顔を背けた。なぜか口に手を当てているが、早坂はそれに突っ込むよりも先に言いたいことがあつた。

「それでも、アピールはするべき。能ある鷹はつて言うけど、爪を隠しすぎても侮られるだけなの、分かつてる？ ……………お陰で私がさつき、どれくらい恥ずかしい思いをし

たか」

「あん？ 後半何言ってるか聞こえなかったぞ」

「つ——！ 聞こえないように言ったの……！ もー今日は最悪！ ほら、さっさと行

け！ 行つて来い小倉あ！」

「はあー!!? 何なんだよまじで！ 全く意味分かんない事で俺、怒られてるのかよ!」

早坂に追い立てられるようにその場を立ち去る小倉。

再び一人、屋敷を歩く彼は、先程早坂に言いかけた事を反芻する。

「俺は、誰かさんにちゃんと仕事をしているって認めてもらえたら、それで良いんですけどねえ」

だが、少しだけ良かったのかもしれない。一日が終わろうという時刻に早坂とくっだらない会話が出来たのだから。

そう、小倉は無理やり割り切つてやることにした。

本日の勝敗——四宮の勝利。

## 第7話 小倉次郎は覗きたい

「いやあ、やつぱりここ良いな。最高のポジションだ」

物陰に隠れながら、小倉はにんまりと笑みを浮かべていた。

彼の目の前には絶景が広がっていた。ひらりと見えそうで、見えない学生たちのスカート。男達の理想であるパンチラの可能性を追い求め、彼はたまに階段の近くで読書をしていた。

くそ最低ゲな行為野郎。そうやって差し支えない行為を、彼は恥ずかしげもなく行っていた。

「うわ、小倉先輩またいたんすか」

「お、石上。良い所に来た」

小倉は人当たりの良い笑顔を浮かべ、彼を——秀知院学園会計・石上優を手招きする。基本的に小倉はこの学校においては常に腰低く他者と接していた。こうやってへりくだっていれば基本的にトラブルが起きないためである。

だが、それは口頭でのコミュニケーションに限る。

今、小倉は階段を登る生徒に絶対に気づかれないようなポジションにいる。そこまで



自信が持てる根拠は至極単純。入念に調査をしたからに他ならない。

人は見知らぬ土地に来たならばまずは周りを調べるだろう。ただ、小倉の場合は日々のストレス解消をするため、この秀知院学園に来た日にはすぐに動き出していただけに過ぎない。

「先輩も懲りないつすよね。確かにここは気づかれない所ではありますが、スカートの中なんて見えないじゃないつすか」

「確かにそうなのかもしれない。けど俺は、その不可能に挑戦したい。人間は心からやる気になればきつと、何でも出来る人間なのだから」

「いや、とつても良い顔で言われてもこればかりは擁護出来ないつすよ」

「最近は何も良いなと思いはじめた」

「いや、『不可能に挑戦したい』どこいったんすか!」

石上優との出会いは特に劇的な物ではなかった。四宮に仕える以上、小倉は主の交友関係は全て押さえており、その関係で石上の名前を一方的に知っていた。

特に関わり合うことも無いだろう、その程度の感想。

だが、ある日の昼休み。石上が隠れて漫画を読んでいた所に出くわし、つい興味本位で何の漫画を読んでいるか訪ねたらなんと小倉も好きな漫画であったのだ。そこから意気投合し、出くわしたら話をする間柄になった。

「しーっ！　大きな声を出すな。まあ、お前もここに来たつてことはそういうことだろ？　ほれ見てみる。今日は割と女子の行き来が多いぞ」

「……まじっすか？」

興味。

石上優もやはり男の子。優という名前は女の子に優しくではない、自分に優しくである。

小倉に促されるまま、彼は隣に座り、物陰から階段を覗いた。

そこで石上、息を呑む。

この学校の女子は皆、レベルが高い。それは石上も良く承知していることである。

そんな女子たちが無防備に階段を登っていく。スカートをはひらひらさせながら。少しだけ長めの、確かに小倉の言う通り頑張れば奇跡が起きるかもしれない丈の長さ。

さながら聖者の行進！  
アイオニアランドのパレード

心を震わされる何かが、そこにはあった。

「石上……良いだろ？」

「……良いっすね」

2人は示し合わせることもなく、拳をこつんとぶつけていた。そこには無言の友情があった。

そうになると、話は早い。

小倉と石上は階段を登っていく女子たちについて、意見を交わし合う。顔面レベルが高い、脚が長いなど、第三者が聞けばドン引き間違い無しの内容である。

瞬間、小倉に電撃が走る!!!

「おい！ 見てみるよ石上！ あの脚、超俺好みだ!!」

「お、どれどれ」

長さ、色、肉付きの具合、そのどれもが一流の芸術家作り上げた至高の作品のようだった。まさに小倉が思い描いていた理想そのもの。

そんな脚を持つ女子は一体誰なのか。彼は期待を込めて、相手の顔へと意識をやった。

「――」

そこには見慣れたサイドポニー。その瞬間、小倉は魂が抜けたように呆然とする。

ここで普通の男子ならば、それが「もしかして俺の好きな奴は……」だの「あいつって、あんなに可愛かったっけ？」などと思いつく浮かべることだろう。

だが、この小倉次郎が今、思っていることはそんな幸せなものではなかった。

「――」

ぱつちりと、目が合っていた。いや、物陰に隠れているので厳密には違うのだが、彼

女はこつちを向いているし、小倉はなるべく大きな動作にならないように、静かに身を隠すことが精一杯であった。

そんな彼の神妙な様子に、石上は思わず聞いてしまった。

「どうしたんすか？ あれ？ あれって確か……早さ」

途端に小倉は口を塞いだ。

「馬鹿野郎。声を出すな。今の奴——早坂さんは犬の耳より聴覚が鋭くなってるんだ。見つければ、死あるのみだ」

「ふぐーっ！ ふぐーっ！」

こくこくと石上が頷いたので開放してやると、小倉は次の一手を思案する。

本来ならばさつさとこの場から去るのだが、相手は早坂である。まだ相手を認識できていないはず、なのだが一度疑問を抱いた彼女がすんなり去るとは思えなかった。

「まあ、とはいえ一縷の望みに賭けるのもまた一興……」

祈りを込めて、再び物陰から顔を出してみた。

すると、そこには誰も居なかったのだ。それを一緒に確認した石上はこう言った。

「先輩、さつさとこくから離れましょう。今なら誰も居ない。俺たちを確認出来る奴は誰もいませんよ」

「……その通りだな。さつさと撤収しようか」

瞬間、小倉にとって聞き覚えの無い声が出た。

「風紀委員です。少し、お話よろしいでしょうか？」

声の主は先端を短く縛ったおさげの少女だった。

小倉は首を傾げ、石上は心底嫌そうな表情を浮かべる。

相手の出方が分からないので小倉が黙っていると、隣の石上が口を開いた。

「何の用だよ伊井野」

「石上うるさい。ちよつと黙ってて」

「……なあ石上、この子は？」

「伊井野ミコ。風紀委員ですね」

「へえ……そんな風紀委員さんが俺に何の用ですか？」

その言葉に、伊井野はキツと睨みつける。

「とぼけないでください！　ここで覗きを行っていると話があつたから確認しに来たのです！」

「……全く、僕はここに読書に來ただけですよ？　こういう変な所で読むと、集中出来るもので。誰が言ったのか分からないんですが、ちゃんと裏があつてのことなんですよね

？」

極めて平静に、小倉は返した。

この程度のプレッシャーはプレッシャーですらなかつた小倉はともリラックスしていた。何せ、四宮かぐやと早坂愛という悪鬼羅刹の類から常に浴びせられているのだ。こういったモノに対する耐性は尋常ではない。

「もし無いならこれは大変な事ですよね？　だって、あの風紀委員さんが無実の人間に罪を与えようとしているのですから」

大概の人間はこう言えば、少しはたじろぐ。何せ、ここに来た理由なんて『そう聞いた』から。これだけの理由であろう。

そこを突いてやれば、こちらが言い逃れる隙は必ず生まれる。

後はその瞬間を待つだけである。

「つていつてるけど騙されないでね〜風紀委員ちゃん☆　確かに小倉くんニヤニヤしながら見てたし〜☆」

小倉、策が崩壊する音が聞こえた!!!

早坂は笑顔のようで笑顔じゃない表情を浮かべ、伊井野の肩に手を置く。その姿はさ

ながら、何も知らぬ者に邪智を吹き込む悪魔の如く。

「い、伊井野さん。そのギャルのお方はどなたでしょうか……？  
初めて見る人ですが……」

「私に貴方と、石上が覗いていると教えてくれた方です」

小倉は逆ギレに近い感情で早坂へアイ・コンタクトを送る。

「ミノガシテクレ」と。

彼女は一度頷き、こう返してきた。

「グタバレ」と。

「それにしても……」

伊井野はまるで汚物を見るかのように、石上へ視線を向ける。

「石上、覗きだなんて本当に最低ね」

「うっ……！」

「私、見損なつた」

普段なら言い返している石上、だが今回は状況が悪かった。自分から進んで覗きに加わってしまったので、何と言おうか頭を悩ます。

すると、そこで小倉は彼の前に立つ。

「伊井野さん、そいつは誤解だね」

「え……？」

「石上は俺の事を止めに来てたんだよ。最初っからな。なあ、石上」

小倉は石上の肩に手を置いた。その手に込められているのは、余計なことは言うな”である。

石上も迷いはしたが、先輩のフォロワーを無碍にするほど落ちぶれてはいなかった。

「ああ、そう……だよ伊井野」

心のなかで謝罪する石上。

その罪悪感の代わり、と言つては何だろうか、伊井野は最初こそ怪しんでいたが、そこまで執着する気もないようだ。

「……ふうん、まあ良いわ。石上、あんたあまり疑われるような行動をしないでね。ただでさえ疑われやすいんだから」

「はいはい、ありがとうございます。……すいません、小倉先輩。俺そろそろ行きますね」

「おー、また今度なー」

「うーっす。あ？ 何で伊井野も付いてくるんだよ？」

「次、同じ教室でしょ。いちいち聞いてこないで」

石上と伊井野のやり取りには棘があった。それが友情から来るものなのか、はたまた別の感情から来るものなのか。考察の余地はあろうが、それをするにはまだまだ距離が



遠い。

人間関係というのはままならないものだな、と自嘲したように笑い、小倉は少しばかりの哀愁を漂わせ、この場から去る――。

「何でこの状況からふつーに逃げられると思ったし？☆ ねえ……小倉ア」

ギャルの格好で、眼だけがいつもの早坂。

一瞬だけ頭を巡らせ、もう逃げられないことを悟った彼はあえて自信たっぷりなこう返した。

「弁護士を要求する」

本日の勝敗——小倉と石上の敗北。

## 第8話 小倉次郎は謝りたい

「おい早坂、こっちのテーブル並べ終わったぞ」

「……」

四宮の夕餉の準備を行っていた小倉は早坂にそう報告したが、彼女は無言であった。物事には理由があり、今回は小倉に非があった。

「おーい」

「……」

「早坂さん？」

戦略的撤退。

小倉は覗きがバレ、早坂に問い詰められた後、全速力で逃げていたのだ。

それが彼女の怒りを買う。

別邸に戻り、いつもの業務をこなすまでは良かった。問題はその最中である。

一瞥し、そして言葉を発さず、早坂は次の仕事へ行ってしまう。

「や、やりづらい……」

これは相当怒っている、と小倉が判断するのは容易かった。

とはいえ、だ。

彼は早坂を非難するつもりは毛頭なかった。何せ、悪いのはこちらだし、可能ならば一刻も早く仲直りをしたい。

「うん、まあ、そうなることやっぱりやることなんて最初から決まっているよな」

一度領いた小倉は早坂の後を追いかけるように部屋を飛び出した。

すぐに早坂は見つかり、彼は歩くスピードを緩める。

「これはひとり言として受け取って欲しい」

「……」

そう前置き、彼は喋り始める。

「あの時、逃げて悪かったよ。何ていうか、お前に見つかったのがすげえ恥ずかしくなつてな」

当然だが、相づちはなかった。だが、彼女が歩く速度を上げなかった所を見ると、少なくとも話だけは聞いてくれるようだ。

それだけで妙に小倉は安心し、更に冷静に謝罪することが出来た。

「もう二度とやらんし、あとお前から逃げない。許してくれないか？」

「……の？」

「うん？」

早坂の声がいつもより小さかったので、聞き返すと、彼女は背を向けたまま問いかける。

「それで、実際に下着は見られたの？」

「いいや。実は一度も見えたことはなかった。……つていうか、多分見てたとしても早坂の脚見たら、全部記憶からぶっ飛んだっていうか、あつ……!!」

だいたい思考のネジが外れていたようで、言うつもりが無かったことを口走ってしまった事に気づいた小倉は咄嗟に手で口を塞いだ。聞いてない事を祈るが、こんな近い距離で喋ったことを聞き取れない方が問題で。

「小倉はやっぱ私も見たの？」

「……ああ、そうだよ。この際言っちゃまうと、お前が一番強く印象に刻まれちゃったよ」  
もうここまで来ると、誤魔化してもどうしようもない結末が待っていることを悟った小倉は、全て正直に語ることにした。

なんなら、ここでパンチでもしてもらってチャラにしてもらおうとすら彼は考えていた。

だが、早坂の次の行動はそんな彼の予想とは反していた。

「お、おい」

早坂は静かに小倉に近づくと、じつと彼の瞳を見つめる。身長差もあり、彼女が見上

げるような構図だ。

無表情でそんな意図不明の行動をされたものだから、小倉、混乱する。

(な、なんだ……? やっぱり全部正直に言ったのはマズかったのか? これは何の顔だ? 殺る気に満ち溢れているのか? 殺るのか? 殺られるのか俺は……!?)

絞殺・刺殺・轢殺……やろうと思えば、全てを証拠無くやってのけそうな凄みが早坂にはある。こんなちよつと動けばキスでも出来そうな距離だ、この先起こりそうな事なんて絞り込むのは不可能に近い。

それはさておいて。

(……めっちゃ近い)

超至近距离!

彼女の息遣いが聞こえてくるほどの距離。早坂はまだ小倉をじつと見つめている。その瞳に感情はなく、一体何をしたいのか小倉は本気で理解出来なかった。

「本当に私が一番?」

見つめながら、彼女は問いかけてきた。それに対する回答はとつくの昔に出している。

「だから、一番だって何回言わせんだよ」

彼の頭の中には、下心はなかった。素晴らしい美術品を見ると、誰もが美しいと言う

だろう。

小倉の回答にはそれくらいの当たり前の気持ちしか込められていなかった。

それを聞いた早坂、再びじつと見つめるとやがてため息を一つ吐いた。

「あだだだだ」

次の瞬間、小倉は両頬に痛みが走る。

何を思ったのか、早坂が彼の両頬をつねっていたのだ。時間にしてたったの数秒だけ。

ようやく解放された小倉は自分の両頬をさすっていると、彼女は再び背を向け、歩き出した。

「夕食の後、10分肩揉み。それで今回は許す」

「許す」。ようやく聞けたこの言葉に、小倉は全身の力が抜けそうになった。気づかない内に、身体が強張っていたのだろう。

これでようやく仲直り。

「つはあく……：…やっぱ覗きなんてお天道様に顔向けられない事はするもんじやないなあ」

覗きは二度としないだろう。二度とこれで彼女を怒らせたくない、というのが一つ目の理由。そして2つ目の理由はとても複雑なもので。

(……もし仮に誰かテキトーな奴のを覗けたとしても、多分俺は早坂の顔がずっとチラついたんだろうな)

何故かは分からない。分からない、が。小倉は早坂に対して罪悪感を抱くことになつていたんだろうという謎の確信があつた。

流星にこれを口にするのは赤面ものなので、今度こそ小倉はしつかりと心の奥底に封印する。

(そーいや早坂あの時確か)

代わりに、小倉は先程の早坂を思い返していた。具体的には許してくれる寸前の、彼女が振り返つた瞬間である。

もしかしたら気のせいかもしれない。

だが、彼は確かにこの目で見たのだ。

(――笑つてたような?)

口元が緩み、微笑を浮かべていた早坂を。

良く思い出してみようと試みるも、それは件の彼女によつて遮られる。

「小倉、何してるし? 早く夕食にして、さっさと肩揉んで」

「へいへい。さっさと飯食つて誠心誠意マッサージさせてもらいますよ早坂様」

何だかどうでも良くなつてしまった小倉は、あの早坂の顔を脳内メモリーにインプッ

トするだけにした。

きつとまた見られると、そう思つて。



「で、だ早坂」

「何？」

「お前、何でこんなガツチガチに肩凝つてんだよ！ お前、何歳だよ！」

「アンタと同一年だけど？ 何？ 記憶飛んだ？」

夕食を終え、約束通り10分間の肩揉みを行っていた小倉はその年不相応の肩の具合に、驚きを隠せずにいた。改めて、四宮家侍女の仕事がどれほどハードなのかを理解する小倉である。

小倉は基本的に四宮の帰宅に同行することはなく、その分の時間を他のことに充てている。しかし、彼女が四宮と共にいる時間は小倉より長い。

本人はそう思っていないのだろうが、掛かる負担は相当な事は間違いない。

「へいへい……」

「んっ……やっぱり小倉の肩揉みは良い」



「だろ？ たまに時間を見つけて練習してんだよなーこれがさ」

「練習？ プロのマッサージ師でも目指してるの？」

「いつかぐや様に追い出されても良いように、色々と噛んでてな。んで、これはそういう目的と実益を兼ね備えたやつ」

「実益って？ ……つうん、ちよ、小倉……そこ、良い」

他の男子が今の早坂から漏れる声を聞けば、たちまち前かがみになることであろう！  
だが、小倉の集中力は凄まじく、目の前の肩凝りを解すことに全ての神経を総動員させていた。手を変え、品を変え、どんどんほぐれてくる早坂の肩。

「実益はいま俺が見させてもらっているこの光景」

「え？」

「早坂はいつも頑張ってるからな。そういう奴がリラックスしてくれてる所を見るのが、俺の実益って事。まあ、色々と捏ねくり回した言い方してるけど、飾りを捨ててストレートに言えば、こうだよ」

仕上げのマッサージをしながら、彼は言った。何てことはない、とてもシンプルに。  
「いつもお疲れさん。だけど、あんまり頑張るな。頑張りすぎると疲れて動けなくなるぞ」

「……ありがとう」

約束の10分が経過した。早坂は立ち上がると、小倉の背後に回り込んだ。「ん？ どうした早坂、うおっと」

半ば強引に椅子に座らされた小倉が彼女に説明を求める。

返答の代わりに、小倉の両肩に早坂の手が置かれた。

「あんまり頑張るな。頑張りがすぎると疲れて動けなくなるぞ。——そっくりそのまま返してあげる」

両肩に程よい刺激。早坂が肩揉みをしてくれていると気づくのに、そう時間は掛からなかった。

「仕事量で言えば、私よりも多いはず。私がこの家のスタッフを管理している指揮官なら、アンタは最前線にいる実働部隊の隊長。私だけじゃ出来ないことも小倉がいるから、出来る」

「へっ、嬉しい事言ってくれるねえ」

「今日のごめん。私もムキになりすぎた」

「それは謝るな。俺が悪い」

「……それもそうだね」

「おい、そこは更に互いに謝り合うパターンじゃないのか？」

「ばあーか」

そこからはしばらく無言の間が続いた。時間がゆっくり経過するかのような感覚。この時間が、たまらなく尊いのだ。

……と、締め括る事が出来れば、それはそれは大層大きな花丸が付いたことであろう。(さつきからずつつつつつといつつつてえぞ早坂ア!!!)

早坂の肩揉みのセンスの高さから来るのか、えげつない力で、えげつなく凝っているポイントをさつきから揉んでくるのだ。これで悲鳴を上げない自分を褒めてやりたいくらいである。

だが、彼女が一生懸命に尽くしてくれているのを見て、小倉は再び己との戦いに集中することにした。

## 第9話 小倉次郎は食したい

「さて、昼休みか」

今日も今日とて勉学に励む小倉。

日々業務で精神をすり減らしている中の一服の清涼剤といつても良いだろう。だから、彼には勉強に対するモチベーションが割と高かったのだ。

気づけば、もう昼食の時間であった。

早速、彼は手作りのサンドウィッチをどこで食べるか考える。

最近小倉はどこで食べると気持ち的に美味いかを探る遊びをしていた。

(屋上、廊下の隅っこ、中庭、教室、今日はどこにするか……)

すると、小倉に近づいてくる者がいた。

「よう小倉」

「あれ白銀会長どうしたんですか？」

「何、今日石上と一緒に弁当でも食うかという話になってな。それで、もしお前の都合が良ければだが、一緒にどうだ？」

「つてことは生徒会室ですか？」

「そうなるな。ついでに少し雑務を片付けるつもりだ」

「ふむ……」

小倉は前回、生徒会室で昼食を食べたことがある。しかし、その時は仕事のことであつたので、ただただ早坂のサンドウィッチが美味いという記憶しか無かつた。

だが、今回はそういった仕事ではなく、ただのプライベート。生徒会室で食べると気持ち的に美味いかどうかを探れるまたとない機会。

小倉の返事はすぐに決まつた。

「白銀会長と石上が良いなら、是非とも一緒に食べさせてください」

実は小倉、生徒会室に入ることに對して、制限がなくなつていた。

四宮は小倉にこう言つた。

「同性の貴方だからこそ出来る情報収集がある。そうよね？ だから貴方にはもう生徒会室に来るなどは言わないわ。——言っていること、分かるわよね？」

あの時の主の表情は、とても優しく、それでいて凍てついていたことは今でも思い返せる。多少のことは見逃されるだけに、しくじつた時に跳ね返ってくるリスクがデカいというのは今は頭の隅に追いやつておく。

「お疲れ様です会長、それに小倉先輩」

「先に来てたんだな石上。よし、じゃあ早速食うか。小倉は適当な所に腰掛けてくれ」

「お邪魔しまーす」

三人は早速互いの弁当をテーブルの上に置いた。白銀はザ・お弁当という非常にオーソドックスな物、石上はコンビニ弁当、そして小倉は手作りのサンドウィッチである。今日は小倉が弁当を作る番だったので、早坂も同じ物を食べている。

「石上の弁当、随分とポリウムがあるな。最近のコンビニ弁当は凄いな」

「まあ、その分栄養とか金額とか放り投じているんですけどね。小倉先輩はそれ、手作りですよ？　料理良くやるんですか？」

「趣味程度に。あんまり金掛けたくないし、それなら自分で作ったほうが良いなーってだけの気持ちで始めたかな」

それに白銀、頷く。

「うむ、分かるぞその気持ち。それに、自分の食べたいものだけを詰められる手弁当の可能性は侮れないものがある」

「石上も今度作ってみてみ？　割とイイもんだぞ」

「そつすね……コンビニ弁当も味濃いのしか無いから結構飽きが来てしまうんで、自分で作るのにはアリつすね」

和男気子あトいクあクいク！

小倉的には縁がない体験である。彼は情報収集として男子たちと一緒にいることが

多いが、それだけである。

距離感を徹底的に保ち、あと一步を踏み込ませない。決して面白くはない立ち回りである。

だが、この瞬間は。生徒会メンバーと話すこの瞬間だけは、何故か小倉はそんな立ち回りをしようという頭が無かった。

(そういや早坂も確か、良くつるんでいる奴が2人いるって言ってたな。……こんな感じなんかね)

そこで、小倉何気なく生徒会室を見回す。学校活動の心臓部だけあり、その広さと家具や調度品の質は一級品。そしてどこかいい匂いもする。

その香りをオカズに、小倉はサンドウィッチを一口。今日はレタス多めのハムサンド。本来の予定なら豚カツサンドにでもしようかと思っていたが、早坂からのリクエストを受けたので仕方なく切り替えたという裏話がある。

滅多に入ることがない生徒会室、そのプレミア感もあり、いつも食べるレタスハムサンドの味が一段グレードアップしたような気がした。

「……いい。おい、聞いているのか小倉?」

「うえっ!!? ああ、すいません! ちよつと考え事をしてました! それで何でしょうか?」

「そうだ。その喋り方だ」

「これですか？」

腰低く接するための、いわゆる仮面である。何か気に障ることがあったらどうか、と小倉は少し心配になる。

「石上とのやり取りを聞いてれば、そっちの喋りの方がリラックスして喋っている感じがしてな。もしそっちが嫌でなければ、俺にもそういう接し方で来てくれないか？」

まさかのお願いに、小倉は思わずサンドウィッチを落としそうになった。

「え、良いんですか？ そんな事言われるとは思っていませんでした……」

「そうか？ まあ、前からだいたい他人行儀だったなと思っっていたんだ。この際だ、気楽にいいこうじゃないか」

「そういうことなら、徐々に慣れていき、いく」

「はっはっは。上出来だ」

それぞれ食べ終わり、少しだけ休んでいると、石上が口を開く。

「そういえば、もうちよつとでテストでしたっけ？ お二人の調子はどうですか？」

「俺はまあ、いつも通りだな。やれることをやるだけだ。小倉はどうだ」

「俺は……いつもよりは勉強の時間を取らないとマズいかもですね……」

「そうなのか？ 確か、小倉はいつも10位には入ってるだろ。そこまで今回は辛い所



なのか？」

訂正しようとして、小倉は止めた。

確かに彼の言うことに嘘はなかった。具体的に言わなかっただけで。懇切丁寧に説明するのも何だか気恥ずかしかったので、小倉は口を閉じる。

「そんな所と言えばそんな所」



今日も日常の業務を終えた早坂は、お気に入りの某動画サイトにアップロードされている動画を見ようとしていた。

そんな時、部屋の扉のノック音が聞こえた。扉を開くと、そこには小倉の顔が。

「さて、早坂。お勉強の時間だ」

「お休み小倉、明日も早いから寝坊しないように……っ」

すぐに閉めようとした扉に足を入れ、ストッパーにしてくる小倉。彼は足の痛みに耐えながら、言った。

「おいもうちよつとでテストだぞ！ 今回も勉強しなきゃお前、順位落ちるって！」

「私は落ちても大丈夫だから……」

「大丈夫じゃねえわ！ 勉強は大事な武器になるんだよ！ 戦士で手前の武器メンテナンスい馬鹿はいないだろ？ 同じなんだって！ 仕事もそうだが、俺たちは勉強も同じくらい頑張らなきゃならねえんだ！」

「いつつ、同じこと言ってくる……っ！ 私はこれから動画を見るの……っ！」

「それはまた今度だ。大丈夫だつて！ いつも通り30分で終わってやるから！ だから30分だけやる気出せ！」

この時期の小倉のやることは決まっていた。

早坂にテスト勉強をさせることである。別に、誰かから頼まれた訳ではない。ただ、小倉が必要だと思ってやっていった。

ただでさえ、勉強する場にいるのが奇跡的な職場なのだ、やるに越したことはない。

「小倉はどうしてそこまで私に勉強させたいの……っ」

「お前がテストの順位低いとか思われるのが癪なんだ……よっ！ お前は優秀で、頑張る奴なんだからやらなきゃならんだろ……っが！」

一気に開け放つ小倉。

そこで彼が目にしたのは、髪を下ろした早坂の寝間着姿であった。決して派手ではなく、質実剛健な彼女らしい最低限の可愛らしさが保証されたデザイン。

だが、今の小倉にはそれに見惚れている時間は1秒もなかった。

「……私は今、ベッドに入ろうとして、こういう姿になっているんだけど、何か感想は？」  
「おう可愛いな。じゃ、30分だけ勉強するぞ」

「少しでもドキつとするかなと思つて聞いた私が馬鹿だった」

「何でだよ、割と勇気出して言つたぞ」

「はいはい。……あく何か話してたら、少しだけやる気出たから今日は口車に乗つてあげる」

「今日だけじゃなくてこれから口車に乗つてくれや」

顎で入室を指示した早坂は一瞬だけ小倉の顔を盗み見た。

少しだけ目に疲れが見える。当然だろう、以前に聞いた睡眠時間がずっと続いているのなら、この時間は自分以上に貴重なはず。

それを自分のために使つてくれる、というのだから無碍に出来ようはずがない。

だから、もしあえて、この状況に対して言葉を紡ぐなら。

「……ありがとう」

「はいはい。どういたしまして。今回はテストの順位、2桁台目標だからな。気合入れていくぞ」

「小倉つて、先生にでもなったほうが良いんじゃない？ 似合つてると思うけど」

「それも良いかもな。けど、どうやら俺はこの仕事の方が性に合つてるんだと思うわ。」

それにその仕事にはお前が……」

何気なく早坂の顔を見てしまった小倉。髪を下ろしている分、普段と印象が違う。

いつもならこの後は軽口を叩けるのだが、そんな彼女を見ていたら何故か喉から言葉が出なかった。

「どうしたの小倉？」

「ええい。聞くな聞くな、さっさとやるぞ」

たかが30分、されど30分。そんな時間が恐らく、2人にとってはとても大切な時間なのだ。

本日の勝敗——小倉と早坂の勝利。

## 第10話 小倉次郎は心配したい

小倉次郎と早坂愛は小さな頃からの付き合いです。

それ故に小倉は彼女の、彼女は小倉の、細やかな違いによく気付ける。

「ふああ……」

小倉起床。朝4時に寝て、朝5時の起床。1時間の健やかな睡眠時間だ。

極端な話で言えば、寝なくても何とかなるのだが、曜日の感覚が無くなるので無理矢理でも寝るようにしているのだ。

簡単にラジオ体操を行い、血行の巡りを良くする。いつも行っているルーティンだ。これをやらなければ身体の調子が悪い。

「ヤーてと」

身支度を整え、部屋を出て、今日のやることを考えながら廊下を歩く。今日も今日とやることは盛り沢山だ。

「……ん？」

立ち止まり、小倉は首を傾げる。だが、気のせいだと思い、再び彼は歩き出す。

「……おや？」

再び感じる違和感。それを振り払い、小倉がまた歩くと、彼女に出くわした。

「おはよ、小倉」

「おはよう早坂」

早坂はあいも変わらず無表情で、彼に一言挨拶をする。

軽く手を挙げ、小倉は彼女へ返事をした。そして、じつと彼は早坂を見る。

「……何?」

「よし、早坂今日は休め」

突然の提案に、早坂は目を丸くする。

「……何で? わっ」

刹那、小倉は早坂の額に手を当て、自分の予感を確信に変える。

「熱いな。熱出てるだろ、お前。言つとくがとぼけても無駄だから」

「……どうして分かったの?」

「俺を誰だと思ってるんだよ。とりあえず今日は寝とけ。病人に仕事されても迷惑なだけだ」

別にこれは意地悪で言っているわけではなかった。この四宮家の「格」の話なのだ。来客は使用人の事情など微塵も興味ない。興味があるのはその時、自分がどうもてなされたか、それだけである。

もし他の使用人仲間が同じように調子が悪ければ、早坂も、そして小倉自身も無理矢理にでも休ませる。

「かぐや様に今日のスケジュールを……」

「頭に入れてるから俺がかぐや様に話してくるよ。だから、今日は一日しっかり休め。休むのも仕事の内だ」

「ちよ……小倉!」

「悪いが無理にでも連れて行くぞ」

がつつり肩を掴み、早坂の私室へ連れて行く小倉。扉を開け、ベッドへ放り出す。

そして、小倉は今日のスケジュールを組み直しながら彼女へ言った。

「絶対寝てろよ? あとで必要な物、持ってくるから」

「……私は、これくらい」

「一度でも倒れたら絶対かぐや様心配するぞ。それでもお前が平気なら見逃してやるが?」

「……意地悪なやろーめ」

「はいはい。じゃ、そういうことで」

ひらひらと手を振りながら、小倉は四宮が起きる7時までに必要な業務をこなすことにした。

他の使用人らと今日の業務の打ち合わせを終えると、小倉は早坂の代わりに監督を務め、優先順位が高いものからサクサクと仕事をこなしていく。

そして来たるべき朝7時。

小倉は四宮かぐやの私室の前にいた。

「もしもし！ 起きてくださーい!! 麗しきかぐや様ー！ 今日も楽しい楽しい一日の始まりですよー!!!」

ガンガンと扉を叩きながら小倉は彼女に聞こえるように大声を張り上げる。

彼の予想では、もうそろそろ起きてくる頃合いであった。

「うるさーい!!! 何!? 何なのですか!?!」

「あ、おはようございます。かぐや様、見てください今日はいい天気ですよ」

「小倉、私に喧嘩を売っているのです……早坂は?」

「熱出しましたんで、寝かせてます」

「早坂が? 大丈夫なの?」

「その話をする前に、まず着替えてもらって良いですかね? 今日のスケジュールは扉

越しに喋るんで、聞いてください」

有無を言わせぬその物言いに、流され、四宮はとりあえず着替えをすることにした。

流石に異性の小倉に着替えの後始末をさせる訳にはいかなかったので、ベッドの上に丁



寧に置く。こうすることで、後で回収されるといふ寸法だ。

そうしている間にも、小倉は四宮の今日のスケジュールを喋っていた。頭の出来が違  
う四宮、これを完璧に聞き、インプリントする。

着替えを終えた四宮が出てくると、小倉は恭しく礼をする。

「改めまして。おはようございますかぐや様、今日も白銀ちゃんと良いことありそう  
な日ですぐぼおあつ……!」

「おはようございます小倉。今日も減らず口が絶えませんね」

思いつきり足を踏まれ、悶絶する小倉に対し、それはとても美しい笑みを浮かべる四  
宮。

下手に突っ込んだら負けなので、愛想笑いで返しつつ、四宮の後ろを歩く。

「あ、かぐや様。俺、今日休むんで一人で学校行つて下さいね」

「あら、小倉はどうするの?」

「早坂の看病します」

「主人の私を差し置いて?」

断じて言っておくが、四宮は別に意地悪をしている訳ではない。

良いか悪いかは置いておいて、小倉が言っているのはこうなのだ。

“主人と使用人を比べたら、使用人の方が大事です”と。

だからそれをちゃんと、正確に理解した上で言っているのかを聞いているのだ。

そんな四宮の言葉を、小倉は涼しげに受け止めた。

「ええ、申し訳ございませんですが差し置かせて頂きます」

だって、と小倉は続ける。

「早坂は貴重で、唯一無二の人材です。例え、これで俺の首が飛ぼうとも早期回復させて1秒でも早くかぐや様のサポートに回ってもらったほうが、かぐや様にとつても良い話じゃないですか」

そういうことなのだ。自分はどこまでいっても、四宮にとつては有象無象の1人。それならば、その有象無象を代償に、早坂愛という四宮にとつて何よりも信頼のおける者に看病の時間を削ぐのは至極当たり前の話である。

爽やかに、そして本当に当たり前のように言つてのける小倉に対し、四宮は大きくため息を吐いた。

「冗談ですよ。小倉、貴方つて時々異常に度胸があるわね」

「何せ、早坂がいないと張り合いが無いですからねー。こればかりは、いくらかぐや様でも譲れませんよ」

「ええ、知っていますよ。だって同じような時期に早坂が来て、そして貴方も来たんですからね」

「まあその代わり、屋敷で早坂が今日やろうとしていたことは全部俺がやります。んで、少しでも俺や、他の使用人の仕事に不備があれば——」

「ええ、分かつてますよ。貴方が全責任を負うんですよね？　くれぐれも私にそんな事を言わせないように……してくださいね？」

「了解です。まあ、俺がそんなハマする訳は無いんですがね！　あつはつはつは！」

四宮は相変わらずだな、とばかりにケラケラ笑う小倉を見る。

軽薄な言動をするくせに、仕事には一切の手抜きも穴も無い。主である自分への失礼な物言いや日頃の行いを鑑みても、その仕事ぶりで全てお釣りが返ってきてしまうレベル。

これで少しでも粗が見つかればそこを徹底的に突けるのに、一切の隙を見せないこの小倉に、四宮はある意味、感動を覚えていた。

「さて、と朝食ですよかぐや様」

基本的に主の朝食に同席することは許されないので、その間、小倉は別のことをやる。今日に限っては特別編だが。

手慣れた手付きで土鍋を取り出し、彼は卵粥を作る。恐らく、今の早坂はこれぐらいが丁度いいだろうと踏んでのことである。

「あいつ、結構熱高かったからな。これぐらいが胃に負担ないだろう。あ、すいませー

ん」

同性の使用人を捕まえ、手早く作った卵粥を早坂の元に持っていくよう指示をする。他にやることもあつたので、後で様子を見に行こうと思つてのことであつた。

だが、使用人は笑顔でこう言つた。

「小倉さんが持つていきなさい！ 絶対に！ 後のことは私たちがやるから！ ええ、本当に！ 私含め、他の人たちは今日一日早坂さんの部屋に入れない呪いにかかつてますから！ じゃつ！ そういうことで！」

一瞬で使用人は消えていた。他の使用人に声を掛けても皆、同じような事を返すだけ。

クーデターか？ と一抹の不安を感じながらも、仕方がないので、小倉は他の人でも出来そうな四宮の世話を任せ、早坂の部屋へ向かうことにした。

「おーい早坂。俺だー小倉だー」

お盆には卵粥と薬、そして水を乗せ、彼は扉をノックした。

寝ているかなと考えていたら、中から声がした。

「……入つて」

思つた以上に弱々しい声であつた。これは相当まいっているな、と予想した小倉は早坂の部屋へ入室した。

「よー早坂、元気？」

「ちよー元気」

「嘘つけ」

さつき見たときより、幾ばくか弱々しくなっていた彼女を見て、小倉は非常に調子が狂ってしまった。

本日の勝敗——無し。

## 第11話 小倉次郎は看病したい

前回のあらすじ！

早坂が熱を出した！ 以上！

「とりあえず近くに座るぞ。ほら、食えるか？」

「自分で食べられる……」

手近な椅子を引つ張り、早坂の近くに座った小倉は粥が入ったスプーンを差し出した。一口食べる早坂。その味に、彼女は満足そうに頷いた。

「……おいし」

「当たり前だ。何故なら俺が作っているからな」

「隠し味、何か入れてるの？」

「愛情？」

「一気に食欲無くなったんだけど」

「ふざけんな、食え」

「良く恥ずかしげもなく、そんな事言えるね」

「ユーモア利かせようと、だいぶ言葉選んだのだが？」

調子が悪くてもなお、その毒舌のキレが落ちることは全く無かった。少しだけ、ホツとしたのは絶対に漏らせない。

早坂の食欲は非常に旺盛で、あつという間に小倉お手製の卵粥を平らげてしまった。米粒一つ無かった。

「一瞬で食つたな。ほくれ、薬」

「ありがと」

「とりあえずは寝ろ。寝てしまえ。そうすれば少しは良くなるだろう」

「……懐かしいと思わない?」

「何かあつたか?」

「ずっと前に私が同じように熱を出した時」

「言われなくても覚えていた。」

同じように早坂が病床に伏した時である。その時もこうして小倉が早坂の看病をしていたのだ。その時は今よりも疲れが祟つたのか、彼女はもう少し苦しんでいた。

その間にも色々あつたのだが、それについては小倉は一切彼女には伝えていない。小倉次郎が行つたのは今と変わらない、ただ愚直なまでに心を込めた看病であつた。

その辺の伝えていないこと、正々堂々と胸を張りたいたいこと、その辺りを全て考慮した彼の返事はこうだつた。

「ああ、そんな事があつたな。まあ、あの頃もテキトーにフォローして、寛大な看病をしてやったよな。まあ、あの頃のお前は体力無かつたんじゃないのか？　今もだけだよ」

「はい嘘」

「……何が？」

「テキトーにフォローはしてないでしょ」

その言葉で小倉は悟つた。「知っている」と。自分が一言も言わず、悟らせないようにしていた事を。

「私が今よりももっと重い熱を出した時、本家の執事達がやってきた。その時、使用人の一人がしくじつた」

本家の執事が四宮のお世話監視にやって来た時だ。

いつも通り、早坂の名代として監督を務めていた時にソレは起きた。

使用人の一人が起こした事、それは「拭き残し」。壺の陰、そこを拭き残していたのだ。

当然、それは本家の執事の目に止まり、そこを担当した使用人に叱責の矢印が向くこととなつた。

何も言えない使用人、四宮の使用人に課せられた鉄の掟とはたつたの1つ。常に完



壁を”。

そのまま行けば、クビコース待った無し。そんな当たり前に、小倉は立ち向かったのだ。



当時、その使用人にとっては絶対絶命のピンチであった。

そんな時に飄々と現れ、小倉は執事と使用人へ聞こえるように言った。

「おう、ありがとう。そうそうそこを残してくれば良かったんだよ」

「君は？」

「その人の監督役ですが」

「その壺の陰に拭き残しがあった。これをゲストが見ればどう思うかね？」

執事は冷酷な瞳でそう言う。

「どうも思いませんよ。何故ならその前に俺が彼女に掃除の仕方をレクチャーしますの  
で」

自分よりも年上。それでも小倉は臆さなかった。彼は続ける。

「そこはわざと残すように言ったんですよ。だから貴方が気にするほどの事ではありま

せん」

「わざと？ その間に来客、もしくはお嬢様が見たら何と言うかな」

「絶対にあり得ない状況に、そんな“IF”を気にするだなんて……本家の教育は相当レベルが高いようですね」

その言葉に執事、目を細めた。それが嘲笑と気づけない程の愚鈍さは生憎と持ち合わせていなかったからだ。

「君は、誰に物を言っているのか分かっていいるのかね？」

「本家の執事様ですよ。だけど仕えている者同士、俺と貴方は同僚だという認識でいるのですが……合ってますよね？」

「それは大きな間違いだ。何故なら私は……」

「かぐや様のお父上の執事だから、ですか？ 冗談じゃない。その程度で横暴利かせていい訳が無いんですよ。良いですか？」

一拍置き、小倉は言った。

「こつちだつてかぐや様に命賭けて仕えてんだ。この人のやつたことはこれからのかぐや様のプラスに繋がっていくという絶対の確信がある。……それに、今日のこの屋敷の仕切りを任されているのは俺、小倉次郎だ。何か貴方の権限で俺とその彼女に沙汰を下せんなら、ここの屋敷の主であるかぐや様の目の前で聞こうか」

小倉には許せないものがあつた。理不尽である。理不尽には挑戦しなければならぬのだ。

だから彼のこの行動にヤキモキする者がいるのだ。



「無茶は止めてつて、何度も言つたはず」

「向こうの質が悪いんだよ。それに、あの場では俺は悪者であつてはならないんだよ」

「……言つてる意味は、分かる」

人を守るというのはそれ相應の代償を払わなければならない。

小倉はそれを平然とやつてのける。

(……ほんと、立ち回りが下手くそというかなんというか)

早坂が後日聞いたこの一件だけでなく、彼は幾度も似たような件で意地を徹している。放つておけば良いのに、いくらでもしやしやり出てくるのだ。

そんな愚直さは持ち合わせていないからこそ、早坂は彼の思考がたまに分からなくなる。

「おつと、悪いな。病人の前で長居しすぎた。俺は戻るよ、サボリと思われたくないし

な。土鍋は後で取りに来るから……っ?」

小倉はそこで動きを止める。自分の服の裾を、早坂が掴んでいたからだ。

「……もう少しサボらない?」

「サボろう」

彼は即答した。心労が溜まっているのだろう。どうにも弱気な印象を拭えなかった。

とはいえ。

こんな状態の、同じ年の相棒を捨て置くほど心に余裕が無いわけではないので、小倉は再び椅子に座る。

「……小倉はさ」

「何だ?」

「小倉はよくもまあ、私に話しかけられるよね」

「お? 喧嘩か?」

「私がいつも突き放しても、アンタはどうしても話しかけてくる。嫌にならないの?」

「それは——」

そこで言葉を止める小倉。

正直に言おう、自分のこの感覚に説明を付けられなかった。たまにモヤモヤとするこの気持ち、この気持ちに名前を与えられなくては、迂闊に彼女の問いに答えてはいけな

い気がして。

そんな彼に、早坂は言う。

「……私だつたら嫌になる」

掛け布団を深く被り、すっぽりと身を隠した早坂。

色んな言葉が小倉の思考を駆け巡る。今の彼女に掛けられる言葉が一体どういうものなのか、長い付き合いのはずなのに、ごくたまに分からなくなる。

そんな時の小倉は、決まってこういう風に思考を整理していた。

「ばーか。それならもうちよつと可愛げある態度でいてくれりや良いだけだろうが。何でお前はいつもいつも素直になれないんだか——」

「——だし」

最後の言葉を言う前に、早坂に言葉を遮られた小倉は良く聞き取れなかったため、もう一度言葉を促した。

「これで精一杯素直になつてゐるつもりだし……！ かぐや様と、そしてアンタだけには私は……」

「早坂……?」

すう……すう……と、布団の中から寝息が聞こえる。葉が効いてきたのだろう。掛け布団が被さったままでは窒息する危険もあったので、小倉は布団を少しだけ下にずらしてやった。

そこには安らかに睡眠に入った彼女の寝顔が。

日頃の疲れが溜まっているのだ、しばらくは絶対に起きないはず。

「まあ、一回起きりやだいが回復してるよな。というかそうじゃなかったらかぐや様に土下座して病院に連れて行くわ」

空になった土鍋を抱え、小倉は部屋の扉まで歩いていく。部屋を出ていく寸前、彼はほぼ無意識に呟いていた。

「早く体調戻せよ。お前がいないと張り合いが無くて、やる気出ないんだわ」

それだけ言い、小倉は廊下に出た。それだけで、終われば良かったのに。

少なくとも彼は、そう思っていた。

「……皆さん?」

全員ではなかったが、使用人達が部屋の前に居た。

途端に使用人達は各々言い訳を述べ、どんどん去っていく。狭い世界だ。こういつたゴシツプの的になるのはとても複雑な気分だが、みんな早坂の事を心配しているのだからという前向きな考えにマインドセットする。



## 第12話 早坂愛は看病し返したい

「完全回復」

翌日、早坂はいつも通りの時間に目覚めていた。

食事を摂り、薬を飲み、ぐっすりと寝る。シンプルだが、今の自分にとってはとても効果的な休息方法であった。

「昨日の分を取り戻さないと……」

一日何もしなかっただけで何ヶ月も仕事をしなかったような気分になる。

この精神的遅れを取り戻すため、やる気を満ち溢れさせる早坂である。

「……ん？」

少し感じる違和感。

どこかデジャブを感じさせるこの状況に、彼女の足はいつもより早く動いていた。

使用人たちと挨拶をし、打ち合わせをし、日々の業務を始める。

そんな矢先に、彼は現れた。

「おはよう早坂」

「おはよ小倉」



いつもどおり人当たりの良い笑みを浮かべて、小倉は彼女へひらひらと手を振った。その時点で早坂、違和感を感じた。

「ん？」

「ん？」

目をゆつくりと開いては閉じ、彼女は有無を言わずに小倉の額に手を当てた。

「うおおお!!? 何だ!!? 何だいきなり!!?」

「やっぱり熱い」

その言葉に小倉、ドキリとする。だがまだ何とか言い逃れできるはずだと思考をフルに回転させた。しかしそんな時間を与えてくれるほど、早坂は優しくなかった。

ここは逃げるが勝ち、判断したが時既に遅し。小倉はがっしりと腕を掴まれてしまった。

「何故逃げる」

「逃げなきゃひどい目に遭わされそうな気がした」

「分かってるなら逃げるな」

「俺は大丈夫だ」

「大丈夫じゃない奴は皆そう言う。皆さんお願いします」

「は? どういうこと……はっ!!?」

他の使用人たちに拘束され、ずるずると引きずられながら小倉は叫んだ。

「おいふざけんな！ 皆も何であいつに協力してんですか!？」

「小倉さん、今日は寝ましよう！」

「花咲さんあとその他諸々、絶対この事は忘れないぞ〜！」

「ほーい、と自分の部屋に放り投げられてしまった彼はすぐに部屋を出ようと思つたら、開かない。開けようとガチャガチャドアノブを回していたら、外から早坂の声が聞こえた。

「小倉、出ちや駄目だからね」

「早坂、俺は別に熱なんか出しちやいないぞ」

「そう思うなら、まずは体温を測つてもらおうか」

「は？ 分かつたわ。じゃあこれで平熱なら即刻俺は仕事に戻らせてもらおうぞ」

ため息と同時に、非接触式の体温計を額にかざす小倉。

彼は嘆息していた。

非常に失礼で、あり得ない。

自らに課している鉄の掟がある。それは徹底した体調管理。

風邪など引く方がどうかしている。常に鋼の精神で自らをマネジメントしているのだから体調を崩すだなんてそんな馬鹿な事あつてたまるか。

「うーん40度かあ」

アウツ!  
高熱!

普通ならばすぐにベッドで絶対安静か、病院に足を運ぶレベルだろう。だが、今の小倉の表情に苦痛の色はなかった。

むしろ絶好調、と言つていいだろう。

「おい早坂あ! 平熱だぞ! すぐ仕事に戻らせてくれ!」

そんな彼の訴えを彼女はバツサリと刈り取る。

「いつもより声の張りが無い奴が平熱はあり得ないから」

同時に扉が開け放たれ、そこには少しばかり不機嫌そうな表情を浮かべる早坂がいた。

「早坂……」

「良いから寝る」

まるで相撲取りのようにひたすら張り手を喰らい、ベッドに倒される小倉。見ようによつては胸キュンシチュエーションなのだろうが、今の彼にとつては絶体絶命の状況と同義である。

何せそこには鬼のような形相で早坂が睨んでいたのだから。

「小倉ア」

「何だよ。俺はいたって平気だ。仕事も問題なくこなせる自信があるんだよ」

「私はこつち。明後日の方角見て誰と喋ってんの」

「ああ、悪いこつちだったか早坂。悪いな。寝起きだからかちよつぱり頭の回転が鈍いみたいだ」

「その目があつちこつちに行つてる気味の悪いバナナのぬいぐるみが私に見えてるなら本気で救急車呼ぶけど良いの?」

「待て待て待て待て。呼ぶな呼ぶな」

寸でのところで意識を取り戻した小倉は、携帯を握る早坂の腕を掴む。その腕を、早坂が触れる。すると、彼女は更に顔をしかめる。

高熱だというのは間違いないと思つていた。しかし間違いないのはそれが思つた以上になつたことだ。

「だったら寝てて。仕事中に倒れられる方が迷惑だから」

キツイ事を言っているのはよく分かっている。だが、小倉の性格を考えたら、いくら扉や窓を頑丈に施錠しても絶対に抜け出して仕事をしている未来が鮮明に見えていた。

だがここで、彼の性格を正確に捉えていた早坂は仕掛けた。

「ただし、今日一日で治すこと。そうしなかつたら許さない。欠勤扱いで給料も差つ引くから」

交換条件！

こうすることで彼の中にある罪悪感を少しでも緩和してやろうという彼女の心憎い気遣いであつた。

もちろん一日で治らなくてもそんなことをするつもりは毛頭ない。

大事なのは、今日一日を休ませることだ。

「……了解。じゃあ、かぐや様に一言言つてくるわ」

そんな彼女の意図を汲み取つた小倉はここで降参する。いつまでも駄々をこねて、彼女の仕事の時間を奪つていたくないという思いが一番にあつた。

今回は彼女の厚意に甘えることにする。

とはいえ、一応雇い主に対して筋だけは通したい小倉の申し出を早坂はすっぱりと却下した。

「私から言つておくから。風邪移つたら大変だし。だから、アンタはさっさと寝る」

「あくもう、今日は最初から最後までお前に負けっぱなしかよ……」

ぱたりと扉を閉めた早坂は、その足で主の元へと向かう。そろそろ起床時間ということもあり、諸々の報告が出来ることだろう。

「おはようございます。かぐや様」

入室をし、着替えの手伝いをする最中、早坂は口を開いた。

「本日、小倉には休暇を与えました」

「あら、珍しいわね」

「風邪を引きました。熱も高いので、今日一日は部屋で休むようにと」

「ああ……ならもう4年ぶりなのね」

唐突に話を発展させた主の言葉に、早坂は首を傾げた。

「4年ぶり？」

「ええ、私の記憶が正しければ、小倉は4年前の今の時期に高熱を出したつきり、一度も調子を崩した事がなかったはずよ。で、今日熱を出したから丁度4年目だなあって」

「オリンピックか何かですか……」

「まあ、それなら仕方ないわ。人間それほど頑丈には出来ていないもの」

着替えを済ませた四宮は何の気無しに早坂を見る。

「じゃあ今日は帰りの車でスケジュールチェックは出来ないわね。確認が必要なことは後で電話するからその時に教えてくれるかしら？」

「は？」

「え？」

四宮と早坂。ここで見つめ合う。片方は「どうしてここで疑問形？」という顔、もう片方は「突然どうしたんだこの主は？」という顔である。

早坂の表情の意味に気づいた四宮は、言葉が足りなかったともう一言付け足した。

「だって小倉の看病するんでしょ？」

「何でそうなるんですか……！」

ここまで高速の反応をされると思わなかった主である四宮かぐや。彼女としては従者がこんな反応をすることの方が意外なのだ。

何せ、従者にこの言葉を投げるだけの根拠が天才・四宮かぐやにはあるのだから。

「だって貴方、今すごいソワソワして、落ち着きがないわよ？」

「な———！」

クリティカル  
一撃必殺!!!

オブラートに包まない、抜身の刃が早坂の首を刎ねた!!!

早坂愛、膝から崩れ落ちそうになる……が大地をしっかりと踏みしめる。

「良いわよ。自分のことくらい、自分で出来るわ。それに今日の会長に告白させる作戦は、早坂の協力はいらない内容ですし」

「良いのですか……？ 2日もかぐや様の側に居ないのですが……」

「私に何度も同じことを言わせないで。ああ、そうだ小倉に伝えておいてください。」

さっさと治してまた馬車馬のように働きなさい、とね」

「……ありがとうございます」

その時の早坂の表情について言及したら、きつと面白い反応が見られるだろうと一瞬四宮は考えたが、今日だけはそれを収めてやる。

出ていく早坂の後ろ姿を見て、四宮は一言呟く。

「あんなに緊張感ある表情をしていたのに、途端に緊張が緩んだ顔になるだなんて……。小倉絡みになった時の早坂は時々からかいたくなるのよね」

ここで四宮、思考を切り替えた。

「さて、今日こそ会長に告白させてみせるわ」

昨日寝ている間に導き出した完璧な作戦が、四宮にはある。

ずっと続いてきたこの恋愛頭脳戦も今日でようやく決着を付けられる確信があった。

今回の作成を脳内シミュレーションすること、およそ1万回。その全てが白銀に告白をさせているという恐るべき結果。

これには四宮、笑いをこらえることが出来ない。

世界が鮮やかに見えてくる。全てが自分の成功を祝福しているようだ。

「待っていないさい!! 会長!!!」



その後の四宮かぐやを語っておこう。

作戦を携え、いざ生徒会室へ入室をしようとした刹那、丁度出てきた白銀とぶつかる四宮。

図らずも抱きつくような格好になってしまったことに対するあまりの衝撃で脳内メモリが全て焼き切れ、作戦が吹っ飛んでしまったというとんでもないやらかしをしてしまったことは、いつか語る日が来るだろう。

# 第13話 早坂愛は看病し返したい続

「……」

目を閉じる。すぐ開く。再び目を閉じる。すぐまた開く。

小倉は今、ベッドの中に入ったは良いが、ずっとこの調子なのであった。

あれから一瞬たりとも寝てはいない。ただ身体を休めているだけに過ぎない。

仕事はおろか、学校も当然のごとく休み。

抜け出そうとすれば他の使用人たちに見つかり、すぐに部屋に連れ戻される未来が見えていたので、その気も起きず、ひたすら待機の時間を繰り返す。

無為に過ぎる時間への恐怖。この感情が今日一日降り掛かってくることの絶望。

詩的に語ってはみたが、要はめちやくちや暇なのだ。

「仕事を……したい」

働かざる者食うべからず。常に働き続け、それに生きがいを見出していた彼にとつて、これはあまりにも残酷な生き地獄となっていた。

既に頭の中では、この別邸の掃除を行っていた。何を言っているかわからないと思うが、彼はこうすることで働きたい欲求を何とかして抑えていたのだ。

脳内ワーキングの最中、それを遮るようにノックの音がした。

「仕事の応援か!? 手が足りなくなっただか!? もう仕事をして良いんだな!」

「そんな訳無いでしょ」

とことん呆れ返っていた早坂がそこにいた。

彼女は手近な机に小さなお盆を乗せた後、小倉の方を見やる。

「何回も何十回も言っているけど、今日はぜつつつつつたい休んでもらうから」

「俺に仕事をさせなかつたら、俺に何が残るんだよ」

「休むという大事な仕事がある。……はい」

「ん、土鍋? お粥か?」

「せーかい」

土鍋の蓋を取ると、味噌の香りがふわりとした。その匂いだけで脳細胞が活性化する。

それは間違いなく、小倉の好物の――。

「味噌粥か!」

「お粥なら味噌粥が好きだって聞いたことあったから」

その話をしたのは一体いつのことだろうか。記憶にも無いことを覚えていてくれたことが少しだけ、嬉しかった。

彼は味噌粥が好きだった。

単純に味もそうなのだが、これを食べるとぼんやりと母を思い出すのだ。

しみりしそうだったので、早速食べようとレンゲに手をのぼすが、それよりも早く、早坂がそれを取り上げていた。

粥を一度掬い、小倉の元まで運ぶ。

その行為に、小倉次郎固まる。

「……その行動の意味を理解しているのか己は」

「は？ どういうこと……」

粥が乗ったレンゲと、そしてそれを掴む自分の手、目の前の小倉。

一度見、二度見、そして三度見。

今度は早坂愛固まる。

「んなつ……！」

漫画あで良く見るアレ!!!

幾多もの男性をドキリとさせてきた神代の頃より受け継がれし妖刀が今、抜き放たれる!!!

無自覚に凶刃を振るいし魔物・早坂愛は今、自分が置かれた状況を確認する。いや、この際確認する意味は無い。

これではまるで甲斐甲斐しく尽くす妻のようではないか。

「……………誰が妻よ」

「何か言ったか？」

「な、ん、に、も。ああーもう。食べさっさと食べ。食ってしまえ」

「あつつつ！ あつつ!! 口の中があつついんですが早坂さん!」

温かなお粥を一息に口へと突っ込まれる、拷問と呼んでも差し支えない鬼畜な行動に小倉悶絶。

味噌の風味、米の食感、煮えたぎるような温度。口の中がズタズタになりそうな、それはそれは奥深い味わいであった。

すぐに水を受け取り、一気に飲み干した小倉。すぐに自分のペースで食べようとすが、第2の矢が放たれた。

「何だ……結構食べられるじゃん。はい、次。あーん」

「次!? これ以上やったら口の中の肉ボロボロになるんだが!」

「あーん」

ずい、と突き出されるレンジ。その目が割と真剣だったので、無闇に嫌がる事もできない。

それに、と小倉は彼女を見る。

(……自分の仕事があるのに、ほんと何でわざわざ俺の所なんか世話焼きに来るんだか)

早坂愛は多忙である。

本来ならここ、四宮の別邸の全てを取り仕切るといふ重責があるのだ。手抜きなど許されないこの現場、全神経を研ぎ澄ませて臨むべきであるこの鉄火場で、彼女はこうして時間を作ってきてくれている。

その好意を無碍にするなど、小倉次郎が許容出来るはずがない。

気合一声。小倉は早坂の突き出すレンゲへ口を開いた。

「あんツ!!!」

なんとも色気のない咆哮と共に一口で味噌粥を頂いた小倉。当然熱かった。涙目になるのは当たり前と言えただろう。

こちらのペースを気にせず、わんこそばのようにひたすらレンゲを近づけてくる早坂には一言も文句を言わず、ただただ食す小倉。

そして、とうとう土鍋を空にできたのだ。その時の達成感はさながら、フルマラソン完走に成功したときのソレと似ていたかもしれない。

「おいし……かった、です」

「それは、良かった」

「フイと顔をそらす早坂。彼女は何故か口元が緩みそうだったので、それを隠すため、咄嗟に行った動作である。」

「ほら、薬。これ飲んで寝れば多分治るよ」

「何から何まで悪いな早坂」

「知ってる？ アンタが熱出したの4年ぶりなんだって」

「え、そうなのかよ。知らなかったわ」

「かぐや様が言ってた」

「すげーなかぐや様、本人でさえ気づかなかったぞ。あの人が俺のことなんか見てるんだよ」

その言葉に少しだけモヤつとした早坂は、思わず口を開いていた。

「……私はアンタの状態にすぐ気づけた」

「……まあ、俺も早坂の状態はすぐ気付けるし、案外そんなもんなのかねえ」

「……そんなもんだよ」

途端に恥ずかしくなった早坂は早急に話題を終わらせることにした。これ以上喋っていれば、余計なことを言ってしまうそうになったのだ。

お盆に入った水と薬を押し付け、土鍋だけを持った早坂は出入り口へと向かうことにした。

「早く治して。アンタが何日もいなくなると仕事が回らなくなるから」

「任せろ。俺を誰だと思ってるんだよ。俺はさっさと治してお前に認め——」

何かを言いかけた小倉。その言葉に反応した早坂が素早く振り向くと、寝息を立てる彼の姿が。

あれだけぎやあぎやあと騒いでいたのに、次の瞬間にはすうすうと眠りに入る彼の切り替えの早さにある意味感心する。

「……………おーい」

軽く呼びかけてみると、何も反応がない。もう一度呼びかけてみても、これまた反応なし。

「……………」

少しばかり悪戯心が芽生えた早坂は土鍋をまた手近な机に置き、彼の元へと近づいていく。ゆっくりと、足音を立てないように。

側まで近づくと、無防備という言葉がぴったり似合うほどに緩みきった顔があった。じつと見つめる早坂はやがて人差し指を伸ばす。

頬を軽く一突き。起きない。もう一度頬を触る。それでも起きない。



「ふふ……」

面白くなつてしまった彼女のそこからは大胆だった。両手で頬を掴み、弄くり回す。女性顔負けの肌質であった。いつ手入れをしているのか分からないくらい澄み切った肌だ。

何より手触りが良い。

不意に片手で自分の頬を触つてみた。もう片方の手は小倉の頬をキープ。揉み比べをしてみると、なんと僅かだが小倉の勝利に感じた。

「嘘だ……もう少し入念にお風呂に入らなければ……。小倉に負けている……？」

少しばかりの敗北感に打ちひしがれていたからこそ、早坂は眠っている彼の次の行動を予測できなかつた。

「へ……」

突如伸ばされる手！

伸びる先は早坂の手へ！

突然起きた出来事に、早坂思考を停止する。

「お、小倉……？」

呼びかけてみるが、反応がない。そして未だ続く寝息。先程よりも深い寝息になつていた。

別に起きたわけでは無いことにホツとしつつも、彼女はこの降って湧いた問題に対して思考を巡らせる。

「……どうしよう」

無理に引き剥がすと起きてしまいそうだった。流石に病気で寝ている者を起こす趣味はない早坂、悩む。

そうすると、次に考えられる一手だが、時間が経って手の力が緩むまでこのままの状態でいることが挙げられる。

しかし、それは仕事の放棄と同義である。だからこそ彼女は悩んだ。仕事を取るか、彼の安眠を取るか。

そんな彼女の憂慮を吹き飛ばすかのように、扉がノックされた。

「花咲はなさかです。早坂さん今、小倉さんの看病でいますよね？ この場から失礼しますね」

「花咲さん。確かにいますけど、どうしたんですか？」

「いえいえ。先程、使用人たちで話し合ったことをお伝えにありがとうございました」

「話し合い？ 何をですか？」

すると、使用人・花咲は元気にこう言つてのけた。

「私たち、今日死ぬ気で働くん、早坂さんは確認だけお願いします！ その代わり私たち使用人の誰一人、小倉さんの看病は出来ない、早坂さんが全面的にお願いします」

ねー！」

「え……!? ちょ、それは困る……!」

「大丈夫です! 私、これでもあなた達より少し年上なんですよ! それに他の人たちの士気は今最高潮に達しています! だからお任せください! それじゃ失礼します!」

そう言い残し、花咲は消えていった。嵐のような出来事に、早坂は引き止めることから忘れてしまった。

「ええ……」

小倉の部屋に取り残された早坂は、このドラマのような状況に思わず乾いた笑いをしてしまった。

寝ている小倉と、そして繋がれている手をもう一度見る。

「ええええ……」

こんなの、一体どう対応を判断していけばいいのか分からない。分かるわけがない。思考回路がバグった早坂はとりあえず1つだけ方針を決める。

「はあ……仕方ないか」

こちらの気も知らずにぐっすり寝ている小倉へ、後で絶対にマッサージを要求することを決め、とりあえず今は近くの椅子に座ることにした。

本日の勝敗——早坂愛の敗北。

## 第14話 小倉次郎は口を滑らせたくない

「いやあ、やっぱ仕事が出来るってどんなに尊いことか分かるよなあ」

翌日。

早坂の手厚い看病のお陰か、本当に1日で治した小倉は、朝の業務を終え、学校でその余韻に浸っていた。

やはり仕事は最高、仕事こそ至高。仕事こそが己を己たらしめるファクターといつても過言ではないだろう。

「ふ、ふ、ふ……仕事仕事仕事」

立派な仕事ジャンキーと化した小倉が仕事の素晴らしさに浸っていると、そこに声を掛ける者がいた。

「よう小倉。具合はどうだ？」

我らが白銀御行。

他の生徒達は彼が放つオーラというか、その目つきの悪さで中々接しにくい中、小倉はそんなのは全く気にしていないため、自然と白銀と話す機会が増えたのだ。

「白銀か、もう大丈夫だ。今なら7徹で仕事出来るくらいには回復した」

小倉、砕けた口調で返答する。

以前、白銀から砕けた態度で接して良いというお許しが出たので、小倉はその言葉に甘えることにした。

他の人には依然として腰低く接しているため、こうして気を張らなくていいのは非常に嬉しい。

「徹夜か。やる分には止めんが、2徹くらいからがキツくなるから注意しろよ」

「あー、分かる。2徹くらいからが妙に意識飛ぶこと多くなるよなー」

「分かる分かる。でも逆にそういう状態の方が勉強捗るんだよなー」

「いや、それは分からん」

徹夜トーク！

徹夜をガチでやっている者と、1時間睡眠というほぼ徹夜みたいな状態だけで稀しか徹夜をしていない者同士の会話はかなりの盛り上がりを見せる！

だが小倉、一手負けている。

白銀の言葉をそのまま受け取るなら、それはもう何かおかしな状態になっていると断言できた。

そんな話をしてしていると、近くに藤原がやってきた。

「会長」

「どうした藤原書記、珍しいな」

「先生から来週の会議の資料を見せて欲しい〜って頼まれたんですよ。あれどこに保管しておきましたっけ〜?」

「おいおい仮にも書記がそんなんでは困るぞ。まあいい、あれは例の金庫に入れてある。鍵もいつものところだ」

「了解です〜。つてあれ? 小倉くん?」

そこでようやく存在に気づかれた。

彼女は人当たりの良い笑顔で、小倉の方へと向き直す。

「小倉くんと会長、結構話すんですね!」

藤原千花という人間はかなりモテる。

見る者全てを虜にする魅力的な容姿、生まれ、そして人を選ばずに平等に接することが出来ればそれだけで男達の憧れの的になるのは必然と言えるだろう。

そんな彼女と話すものだから、白銀はともかく、小倉は他の男子からの視線が厳しくなるのを感じていた。

屋敷での仕事時なら何かと言い返していたのだろうが、今は学生モード。ただただその嫉妬に込められた視線を受け止めるだけの簡単なお仕事だ。

「そうですね。話が合うことが多いので、こうやって話しますね」

「そうなんですかくじゃあ私もきつとお話し合いますよ〜!」

ニパーツという擬音が良く似合う。底抜けの明るさと、何も考えてなさが良く表れている。

とは言うわけにはいかなかったので、小倉は可能な限りオブラートに包んでやることにした。

「そうですね。藤原さんのように明るい人ならきつと何でも、誰とでも話が合うことでしょうね」

「えへっえへっ! 会長どうですか〜? 私、誰とでも話が合うんですよ〜!」

「分かった分かった。小倉、あまり藤原を調子づかせるな。後が面倒くさい」

「あはは。確かに。それでほしい痛い目見るんですよね」

「あく! 会長と小倉くんひどくい!! ……あれ?」

そこで藤原、首を傾げた。

白銀と小倉はその行動の意味が分からず、ただ顔を見合わせるだけであった。

——ここで小倉、逃走しておくべきだったのだ。

そうしておけば、この後起きる心理戦の席に座らなくても良かっただろうに。

「小倉さんつてもしかしてどこかで会ったことありますか? 何かこう……妙に私に理解があるというか何というか」



小倉に電撃走る。そこで彼はやらかしたことを悟った。

四宮の別邸に藤原千花は結構やつてくる。だからこそ早坂は一切を悟らせないように男装するし、小倉も身なりをだいぶ変えるのだ。

これは早坂に怒られる。

彼女にどやされる場面が脳裏を過ぎりながら、まずは小倉、ジャブを入れる。

「以前、生徒会室でババ抜きしたじゃないですか。その時でだいぶ人間像が掴めたつていうか、そんな感じですかね」

「ああ……そういうえば藤原書記と小倉、ババ抜きしてたなあ」

「そうそう。その時の藤原さん、とても必死だったから印象に残っちゃって」

「そうなんですかね？ 何ていうか、上手く言えないんですけど小倉くんの言葉はもつと私の事を知っていたからこそ自然に出たつていうか……？ だって小倉くん、さつきノートタイムで同意してたじゃないですか」

それに、と藤原は言う。

「さつき言つてましたよね？ だいたい痛い目見るつて。確かに私つてだいたい痛い目見てますけど、その時に小倉くんつていませんよね？ 誰かに聞いたんですか？」

小倉、動揺を隠すのに精一杯。

彼は早坂と、そして四宮に言われていた言葉が浮かんでくる。

藤原千花には最大限の注意を払え——。

今にしてようやく理解したその言葉の意味。

(しまった……！　これ下手に言い逃れすれば詰められる……！)

ここで小倉、誰かの名前を出すあるいはテキストにはぐらかすとしよう。すると、藤原は必ず調べ上げてくる。そんな確信が彼にはあった。

当然、四宮かぐやの名は出せない。そんなことをすれば、比喻表現抜きで首を切られてもおかしくはない。

白銀はここにいるから墓穴を掘る、石上もアウト、そうなればもう誰もいない。

(やべえ……本人に暴く気がない分、これは純粹に興味本位で追求されるぞ……)

四宮かぐやは言う。

藤原千花という人間は、欲望と自己愛に満ち溢れた人間だ。だが、決して間抜けではない、と。

早坂愛は言う。

藤原千花という人間は、常に予測不能な人間だ。だが、決して愚かではない、と。

「あれ、小倉さんどうしました？　何か顔色悪いですけど……」

「いや、顔色どころか全身の血の気が引いているというか」

打つ手無し!!

口から出た災いとはまさにこのこと。

次があるのならば、次は上手くやりたいなど、半ば諦める小倉。

突然の肩掴み!!!

「やつほ〜! 小倉くん〜! ようやく見つけたし〜! ☆」

白銀と藤原を掻き分けるように表れ、小倉の肩をがっしりと掴むは早坂愛。

小倉が最も信頼し、対抗心を抱く人物だ。

「あれ、早坂さん!?! どうしたんですか〜?」

藤原の問いに、早坂は両手を合わせる。

「ごつめ〜ん書記ちゃん、会長さん! 何かお話し中だった? 実は先生が小倉くんを

急いで呼んでこいって言われて来てるんだよね〜!」

「俺が?」

「も〜小倉くん、何やらかしたし〜☆ さっ。さっさと行こ? 書記ちゃん、会長さん良

い?」

流石に先生が至急の呼びつけをしている以上、白銀と藤原に止める権利はなかった。むしろ、さっさと行けとばかりに首を縦に振るばかり。

それを見た早坂は満面の笑みで、小倉の腕を掴む。

「ほらほらくじやあ行くよ〜！ 頼まれた以上、私も行くし〜！ じゃあね！」

「2人ともごめん。また、今度」

そうして早坂に連れられ、廊下を歩くこと数分。手近な物陰の近くまで行くと、早坂は鬼の形相で小倉を引き込んだ。

「……何か言うことは？」

「まじ助かった」

本当にそれしか言葉が出なかった。あの瞬間の早坂は本当に救世主に見えたため、流石の小倉、殊勝な態度に出ざるを得なかった。

しかし、どうしてあんなに都合のいいタイミングで割って入って来れたのか。

それを聞くと、早坂は呆れた顔になる。

「あれだけ教室の外まで聞こえるくらいに喋ってたら誰でも聞こえるし」

「そうなのかし」

「真似するなし」

「痛い痛い痛い。アイアंकローは止めろ」

本気で掴んでいたため、涙をこらえるのが大変だった。

小倉は頭のあらゆる箇所を擦りながら、こう言う。

「助けられたのはほんとだ、ありがとうな。……それにしても藤原ちゃんやべえな。気緩めたらあつさりバレそうだ」

「だから私やかぐや様があればほど気をつけろって言ったのに」

「いや、ほんとだわ。もう二度とこんなハマヤらん」

頭を下げられたことで、少しばかり気分が良くなったのか、早坂は少しだけ表情を緩めた。

「しつかりしてよ。アンタがバレたらきつとかぐや様はアンタを切る。もしそうなら張り合い無くなるんだから、上手くやってよ」

「……心配してくれてんのか？」

「ちーがーうーし！ 甘えるな」

「痛って！ チョップは無いだろチョップは！」

「全部アンタが悪い。今日の夜のまかないは私の食べたい物ね」

「そんなんいつでも作ってやりますわ。何が良い？」

これで貸しーつ作ってしまったことをあえて口に出さなかった小倉。言及すればきつと、もつと彼女は付け上がることに間違いなかった。

本日の勝敗——小倉次郎の敗北。

## 第15話 小倉次郎は呼び出されたくない

今日も今日とて1日を終えた小倉は、充実感に包まれていた。

そのままいつもどおり勉強し、4時には眠りにつけければ良いのだが、今日は予定があつた。

目的地まで歩いていると、後ろから声を掛けられたので、振り返るとそこには早坂がいた。

「お疲れ小倉」

「お疲れ早坂。今日も1日働いたな」

「ん」

どちらから促すことなく、2人は歩き出す。

その道中、特に喋ることもなかったの、黙々と歩いていると早坂から話しかけてきた。

「小倉はさ」

「ん？」

「この前、書記ちゃんと喋ってたじゃん？」

「ああ、この間の相当やべー時な。あの時は本当に助かったわ。お陰でかぐや様に吊るされずに済んだ」

「それは感謝してよ。いや、そういうことじゃなくて」

少し歯切れ悪そうに、彼女は聞いてきた。

「書記ちゃんはどう思う?」

「何だその質問」

「いーから」

「んーそうだなあ」

突然の彼女の質問に面食らいながらも、小倉は振り返ってみた。

藤原千花という人間はあの時感じた事が全てであった。

明るく、別け隔てなく接することが出来る、人当たりの良い少女。ただ、時折異常なくらい勘が良く、やはり最重要危険人物だという印象で揺るぐことはないだろう。

ただ、と小倉はそこで一瞬思考を馬鹿にする。

「おっぱい大きくて可愛い子だよなー」

その言葉が出る前の思考を口にしておけばまた違った結果になっただろうに、その辺を一切合切省いた結果がこれである。

早坂の目つきが鋭くなるのも、当然の帰結であろう。



「ふーん。小倉は書記ちゃんのことそういう風に思ってるんだ」

「いや、あれは男ども放つてはおかかねえって。お前も知ってるかもしれないが、書記ちゃんに告白する奴ら結構いるんだぜ」

「知ってる。私の調べた限りでは男子の人気ランキングトップだし」

「やつぱりそうだよな。ってか、何だその調査」

「かぐや様と会長をさっさとくつつけるために、何か参考になる女子がいるかなと思つてね」

「お前、ほんとにかぐや様のために何でもするよな。すげえわ」

突然褒められたことで調子を崩されそうになる早坂。そんな素振りを一切悟らせぬよう、彼女は更に小倉へ話をする。

しかし声は、とても小さく。

「……私も書記ちゃんみたいにすればモテたりするのかな」

「いや、それは無いだろ」

「は？」

殴られる気配を察したのか、小倉はすぐに言葉が続ける。

「お前がそんなマネしても絶対に後で辛くなるパターンだろうが。ふつつーのお前が、ふつつーにいてくれればそれだけでモテるって。絶対にさ」

「良くもまあ恥ずかしげもなく、そんな事を……」

「俺が保証してやるよ」

「彼女いない歴がそのまま年齢の奴が何言ってるの」

「お前も彼氏いない歴イコール年齢だろ?」

バチリ、と二人の間に火花が飛び散る。とは言え、今日はそこまで口喧嘩をするつもりは無かった小倉。

少々強引だが、話題を変えることにした。

「ところでさ、何で今日は俺も呼ばれてんの? かぐや様に」

小倉が向かっていたのは主・四宮かぐやの私室であった。

本来ならよほどの緊急事態でも無ければまず入ることはないであろう禁域。せいぜい近づいたとしても、前回、早坂がダウンした時にああやって四宮を起こしに行くのが関の山。

しかも、と小倉は彼女を見る。

早坂だけでは用件が足りないのか。というのが自然な疑問である。

「早坂は何か聞いてないのか?」

「いや。全然」

「あの腹黒お嬢様が早坂以外を呼びつけるなんて普通じゃねえよ」

「小倉、言葉」

「おっと、こりやいけない。聞かれてたら困るな。まあ、まだ部屋までは距離あるから聞こえてないか」

「……そういう風に言っているとんでもない仕返し来るよ」

もしバレたら。

そんなもしもを何となく想像して身震いをしたと同時に、彼は笑い飛ばした。

「まあ何されるか分からんから怖いよな」。胸の大きさと報復レベルは反比例するって言うしな。あ、あと寛大な心も反比例するっていうんだっけかな？ あっはっは！」

もう少しで四宮の私室へと辿り着く。

部屋についたら決して余計なことと言わないように、と早坂に念を押される小倉。いくら何でもそんなへマする訳ないと彼は笑い飛ばし、廊下の突き当りを右折する。

「胸の大きさと寛大な心は、報復レベルと反比例する。新しい角度の新鮮な発見ね。――

――ありがとう小倉。おかげで知見を広げる事が出来たわ」

四宮かぐやが、立っていた。

それはとても、とても、冷たい目をしていたそうなの。

見つめ合う小倉と四宮。彼はとても優しい笑顔で、恭しく礼をする。

「これはこれはかぐや様。こんな夜中に歩き回るとお身体に触りますよ？ それに今夜は冷える。ベッドに入り、暖かくしてお眠りください。それでは私はこれにて失礼をば」

「そういう貴方もここでは冷えるでしょう？ せつかくだから私の部屋に來なさいな。そうだわ早坂、たつぷりとお話しが出来るようにコーヒーでも入れてくれるかしら？」

「かしこまりましたかぐや様。おぐらさまは先に部屋にお入りください」

瞬間、逃走を図る小倉。それを読み切っていた四宮、肩をがっちりと掴む。武術を嗜む彼女は適切な力で、適切な箇所を掴むことで効率良く彼を抑えることが出来ていた。

逃走不可能。

気づけば彼は、そそくさとコーヒーの準備をしに行った早坂の背中へ呪いの言葉を吐いていた。

「おい赤の他人のフリしてんじゃねえぞ早坂！ おい裏切り者！！」

「部屋に入る」

「ひゃい」

有無を言わさぬ迫力に、入室してすぐ直立不動の体勢を取る小倉。

その立ち振り舞いはさながら荒野に突き刺さる一本の刀とでも言えよう。顔面は蒼白である。

「私、藤原さんには結構面倒見が良いって言われてるんですよ」

「ういっす」

「そんな私への評価にしては少々、酷いが過ぎると思わないかしら？」

「かぐや様、どこまで聞こえてらしたんでしょうか？」

「あなた達を出迎えようと部屋の外に出たら、ちょうど2人のやり取りが聞こえてきたからまあ……最初からかしらね」

「あつ、そうですかー」

ゲームセット  
人生終了!!

生まれ変わりとというのが本当にあるのなら、今度はもう少し愛情溢れる主の元に仕える事が出来ますようにと彼はとりあえずは祈ることにした。

「失礼しますかぐや様、コーヒーを淹れて来まし……あ、やっぱり土下座してる」

早坂の目に飛び込んできたのは仁王立ちで笑顔を貼り付ける四宮と、地面に口づけをしている小倉の姿があった。

だから最初から止めておけば良いのに、と彼女は喉元まで出かかったがそれを飲み込んだ。

「小倉」

「はい」

「貴方の役目は？」

「馬車馬のように働くことです」

「次はないわよ？」

「ありがたき幸せ」

そこでようやく早坂に気づいた四宮は彼女を呼び、コーヒーで一服することになった。

小倉と早坂も飲むことを許されたので、それぞれ一口飲むことにした。

彼は早坂のコーヒーが好きである。プロ顔負けの一流の仕事がそこにはあったからだ。

「さて、色々ありましたか？2人を呼んだのは他でもありません。会長にどうしたら告白してもらえるかを考えるために呼びました」

「そういうことなら俺いらんないんじや……」

「いいえ。男性の視点から見た貴方の意見も欲しいわ。最近、会長と付き合いが多いし、何か良い意見が出ると期待してるわ」

——これはもしかして良い意見出なければ給料カットされるやつか？

一瞬だけ小倉に悪寒が走る。

「あー……なるほど、早坂これ面倒なやつか」

「面倒なやつよ」

「2人共！ 何その呆れた顔は！ 私は真剣なのよ！」

そうは言われても、小倉と早坂の意見はほぼ同じだった。既にアイ・コンタクトも交わしている。

四宮かぐやは白銀御行のことが好きである。

だが、余計過ぎるプライドが彼女を面倒にしている。ただでさえ面倒な性格だというのが、の。

そうなつてくると、どんな妙案を提案しても変なプライドがことごとくを却下してくるであろうことは目に見えていた。

「あーそれならかぐや様、俺に妙案があります」

「私も案が1つあります」

「あら、随分早いわね」

2人は頷き合い、そして示し合わせた訳ではなかったが声を揃え、こう言った。

「かぐや様が押し倒せば片が付きますよ」

「お、おお押し倒す!?!」

顔を真っ赤にする四宮が面白くて、そしてさっさとこの話を終えたかった2人は無言の協力体制を取り、徹底的にからかってやることにした。



## 第16話 小倉次郎は言いくるめたい

前回のあらすじ！

四宮に危うくひどい目に遭わされそうになったが、奇跡的に免れることが出来た！

平和を噛みしめる小倉であった。

それはさておき、場面は四宮の私室。ひとしきりからかった後、小倉と早坂は真面目に相談に乗ってやることにした。

「で、それでかぐや様は結局の所、白銀ちゃんとうなりたいんですか？ 付き合いたいですよね？」

まずは小倉がジャブを打つ。

そんなことはないが、恋に恋しているだけという可能性もある。そういうことならばさつさと自分の気持ちに区切りを付けてもらったほうがいいという判断だ。

彼の問いに、秒で返事が返ってきた。

「付き合いたいんじゃないの！ 付き合つてあげてもいい、よ！ 間違えないで小倉！」  
「うっわ、早坂良く今までぶん殴らなかつたな」

「でしょ？ こればかりは手をあげなかつた私を褒めてほしい」

とりあえずこれで四宮かぐやは白銀御行に好意を抱いていることが改めて分かったので、小倉は思案する。

といつても、最も簡単で、最も効果的な策は一つしかないだろう。

「早坂がもう何百回も言ってるかもしれないませんが、素直に好意を伝えてみたらどうですか？」

「それじゃあ私がまるで会長と付き合いたいみたいじゃないの！」

「いやいや、何も告白しろとまでは言いませんよ。良いですか」

そう言つて、小倉はパズルを組み立てるように思考を回す。なるべく四宮の怒りを買わないよう、そしてなるべく早めに今日の結論を出して自分が早く自由時間に入りたいために。

「好意を伝えるというのは何もすぐ恋愛に直結するわけではありません。人間関係を円滑にするため、自分は貴方に好ましい感情を抱いていますと伝えるのは必須です。私はお前のことが嫌いという奴を好きになれますか？ 好意を伝える努力というのは今後の社会生活を送る中で培われなければならないフアクターだと思っています」

熱弁を振るう小倉を見て、早坂はジトととした視線を送っていた。

口が回る回る。

そういう時の彼は、だいたいそれっぽく話をそれっぽく話しているだけなのだ。

「なるほど……小倉にしては一理あるわね」

「先程も言いましたが別に告白しろとまでは言いません。ただ、少しでも好意を伝える量というか質を向上させてみたらどうでしょうか？ そうしたらきっと白銀ちゃんもたまらずかぐや様に告白してしまう!!」

「会長が、私に!!!」

こと白銀絡みになるとアホになる四宮かぐやは、既に頭の中で妄想が広がっていた。

いつもより少しだけ多い言葉、いつもより少しだけ近い距離、そんな攻めの姿勢を見せる四宮にときめいた白銀はたまらずこう言うのだ。

『四宮、俺と付き合ってくれないか?』

気づけば四宮かぐや、拳を天につき上げていた。

「いける!! これはいけるわよ!!」

そんな彼女へ忠臣・早坂愛はすかさず援護の一射を放つ。

「それならばかぐや様、会長さんのお弁当を作って持つていくのはいかがでしょうか?」

「お弁当?」

「そう、手作り弁当です」

「手作り弁当!?!」

手作り弁当!!

形こそ色々あれど、自分の好きな物を自分の好きなだけ詰め込める夢と希望に溢れた逸品である!

そしてそれは解釈を変えると、特定の相手の好きな物を沢山詰め込み渡すことで、相手に喜んでもらえる至高の武器へと豹変するのだ!

「確かに早坂の言うとおりだな。俺もその案は賛成ですなかくや様」

「でも会長って確か、いつも自分でお弁当を作ってきているはず……」

「でも」の辺りから既に小倉、携帯電話を取り出していた。

「あ、もしもし白銀? ごめんなこんな夜中に。実はさ、明日ちよーっとだけ俺に協力して欲しいだよな。何って? ちよっと最近、お前の弁当を見て、本格的に料理始めてさー。それで俺の料理、食ってほしいんだよ。頼む。……そうか? ありがとう! 助かる! じゃあ明日、弁当作らずに生徒会室にいてくれよ。持っていくからさ。オーケー、それじゃ!」

通話終了ボタンを押した彼は四宮に向き直る。

「それは解決しました。明日、俺は白銀ちゃんに弁当作るの失敗してしまった、って謝り倒すんでその時にかぐや様は弁当を渡せば良いんです」

「小倉、貴方……」

「あんまり白銀ちゃんに嘘つきたくないんで、この手は最初で最後にさせてください。ということまでこれから弁当を作る準備をしましょう」

「これから!？」

小倉とアイ・コンタクトを交わした早坂は意図を汲み取り、四宮の肩を掴む。

「別に徹夜とは言いません。ただ、明日の弁当作りをスムーズにこなせるよう、下準備をするだけです」

「わ、私に出来るかしら早坂……?」

「出来ますよ、かぐや様なら」

贈り物をするという行為は、好意を伝える最もシンプルな手段であると小倉は考えている。

昔の国でも贈り物をし合い、仲を維持していたのがデフォルトだ。昔の時点で洗練されたこの行為が、今の現代で通用しないわけがない。学生レベルでその究極と言えるのが、手作り弁当といえる。

自分のために手間暇を掛けてくれたという事実がグツと来る……はずだ。

「早坂の言うとおりですよかぐや様。やる気と想いがあれば、何だつて出来ます。そういうことで方針も決まったし、私もお役御免ですね。それじゃあここで失礼します」

出ていこうとした小倉の肩を、早坂ががっしりと掴む。

「何逃げようとしてんの？ 小倉も手伝うに決まってるじゃん」

「は？ 俺も手伝うのか!？」

「当たり前。アンタもいなきや、男性の味の好みとか色々分らないでしょ」

「早坂の言う通りよ小倉。よもやこのまま去るだなんていうのは無いわよね？」

「この流れでイケるかなあと」

瞬間2人から吹き上がる“圧”。

これは一種のパワハラということだけは今の小倉でも分かるのだが、いかんせん声を上げるタイミングが全くなかった。

四宮家別邸労働組合なるものを立ち上げてみるか、と割と本気で考えてしまった小倉であった。



「というところでこれで前準備は整いました。後は明日、少しだけ早く起きて最後の仕上げに取り掛かります。よろしいですね、かぐや様？」

「ええ、ありがとう早坂。そして小倉」

「明日は寝坊しないでくださいねー」

「あら、私を誰だと思っているのかしら？」

「天下無敵の四宮かぐや様でございます」

早坂、そして小倉と監督役が2人も付いていれば、あとは天性のセンスを持つ四宮かぐやが物事を教わりながらテキパキとこなすだけ。

小倉的には実に簡単な仕事だったと言えよう。何せ、自分は殆ど見ているだけ。要所要所で口を挟んでいけば何も問題なかった。

明日のお弁当の中身は唐揚げや卵焼きなど、比較的オーソドックスな内容となっている。となると重要となってくるのは味付けや盛り付けである。

そこは明日、しっかり考えようということ、今夜はお開きとなった。

四宮を私室まで見送り、2人はそれぞれの部屋まで一緒に歩くこととなった。

「いやー、お弁当ですよお弁当。あのかぐや様がお弁当ですって奥様」

「ノリが気持ち悪い」

「いや、でも本当にいい傾向じゃないか。あのかぐや様だぜ」

人を疑い、距離を明確に作り、身近に置いておく相手を選ぶ。そんな四宮かぐやが理由はどうあれ、相手のために何かをするということがどれほどのことなのか。

彼女を知る者は皆、驚くに違いない。

「最近のかぐや様は良いな。昔に比べたらだいぶ笑顔が増えた。それも白銀ちゃんや生

徒会メンバーのお陰だと思うぜ」

「そうだね、本当にそう思う」

「それ以上に早坂がいるからでもあるんだぞ」

「私が？」

一度頷き、小倉は続ける。

「かぐや様にはお前みたいな信頼出来る奴が一人は付いていなきゃならないんだ。その信頼つてやつは一朝一夕で築けるもんじゃない。だから、お前はいつまでも付いてやれよ」

「それって何だかアンタはいつまでも付いていないみたいじゃない」

「あら？ 言葉を間違えちゃったな」

訪れる沈黙。廊下には足音だけが鳴り響いた。

もう少して早坂の私室へと辿り着く。

そんな道中で、彼女はぽつりと言う。

「もし私がかぐや様を……」

「ん？」

「ううん。なんでも無い。小倉はいつでも小倉のままだね」

「どうしたんだよ急に。気持ち悪いな」



「小倉はいつまでもそのまま置いてね」

その意味を聞き返そうとしたら、扉がパタリと閉められてしまった。

全く意図を読み取れず、首を傾げる小倉。だが、そんな彼でも一つだけ約束できることがあった。

「俺が今こうしていられるのもかぐや様とあと、お前のお陰だよ安心しろ」  
大事な者達のために、粉骨碎身することだけである。

本日の勝敗——引き分け。

## 第17話 小倉次郎は恥ずかしがりたくない

翌日。

早朝に四宮のお弁当づくりを手伝った小倉はいつもとは違う疲労を感じながらも無難に学校生活を送っていた。

彼女は白銀へお弁当を渡せたのか、それだけが気になりながらの1日だったため、割と一瞬で時間が過ぎていた。

時間はあつという間に放課後。

帰ろうかと廊下を歩いていたら、背後からとても良く知る声が聞こえた。

「小倉くん！ ちょっと待ってくださーい！」

「げっ！」

藤原千花！

歩く災厄とも言える彼女はそれはいい笑顔で小倉の元へ走り寄ってくる。

本当ならば今すぐにでも逃げ出したい気持ちで一杯だったが、ここで逃げ出したら絶対に後で面倒くさい事態になるのは目に見えていた。

小倉、覚悟を決める。

その覚悟の度合いはさながら、100万の敵軍相手に殿を務めるかの如く。

「今、『げっ!』って言いませんでした?」

「何の話ですか?」

「うーん、まあ良いでしょう! 許してあげます!」

にぱーっという擬音がよく似合う程の笑顔を浮かべる藤原。

そんな彼女の一举手一投足に注意しながら、小倉は当たり障りのない内容からコンタクトを開始していく。

前回やらかしているため、もう小倉に二度目はない。これは最初にして、最後のリターンマッチなのであった。

「どうしたんですか藤原さん。急に走ってくるだなんて……」

「それはですね。小倉くんとお話しがしたくて!」

これでまだ、先生が呼んでますーくらいの案件であれば小倉も冷静に対応が出来たであろう。だが、今回はその彼の想像を遥かに超えていた。

何の目的もなく、いや目的は一応あるのだが、その内容が小倉のさじ加減で容易く終わらせられる内容ではなかった。

となれば、対処は早いほうが良いに限る。

「ア、ボク、コノアトヨウジガアルノデ。オツカレサマデス。ハハッ」

可能な限り、早口でまくし立て、小倉は一礼し、その場を去る!!

「嘘だ! 絶対嘘だ! 何で私と目合わせないでそれ言ったんですか!?! とうか、本当だとしてももつと申し訳無さそうに言いましょうよ!?!」

「申し訳ない気持ちでいっぱいですよ! だから今すぐにも消えてしまいたい! じゃー!」

「まー! まー! まー! 消えなくてもいいので! もうちよつといきましょう!」  
さつさと去ろうとしたら藤原に右腕をがっちり掴まれてしまった。

このまま振りほどくのも良心の呵責を感じてしまうので、強硬手段にも出れなかった。万が一、そんな手段に及んでしまったことが他の男子にバレてもしようものなら、彼女のファンクラブに袋叩きにされる未来しか見えなかった。

既に小倉に残された選択肢は1つしか無いのだ。

「……まあ、俺も藤原さんとは話してみたかったんで丁度いいっちゃ丁度いいかもですね」

「やった! 小倉くんって良い人ですねえ!」

「そのまま帰らせてくれると嬉しいんですけどね!」

「うっわ小倉くん、どっちなんですか!?!」

こころこころ変わる表情が面白い。この話していて楽しい感が藤原千花の人気の源なの

であろう。

実際、他の男子にそれとなく聞いてみたらだいたいがこの理由である。

なるほど、確かに分からないでもない。

「まあ、良いでしょう。今日の私は何でも許してあげちゃう系女子の藤原千花なのです。こほん……早速なんですけど、小倉くんはどうやって会長と仲良くなったんですか？」

「うーん、いつの間にか仲良くなったとしか」

「え〜？ そうなんですか？ こう言っちゃあれですけど、会長ってぱつと見怖いじゃないですか？ だから自然と仲良くなる人って珍しくて！」

白銀への認識がよく分かるその物言いにツツコミそうになりながら、小倉は何となく彼と仲良くなったキツカケを思い返してみることにした。

「俺って結構影薄いじゃないですか」

「そうですね」

「藤原さんって護衛の方がいますか？ 居なかったら今すぐぶん殴りたいんですが」

「こっわ！ え、何でいきなりバイオレンスになるんですか!？」

息を吐くかのごとくデイスつてくるものだから思わず手が出そうになってしまった小倉である。

冗談抜きで本当に殴り倒したかったのだが、ここは金持ちのエリートだけが集まる立・秀知院学園。

実際手を出してしまうと隠れている護衛に撃たれる……だなんていう未来もありえない訳ではない。

断じて、これは女性を尊ぶとかそういう次元の話ではない。その行いに命を懸けられるか、否かという話である。

「すいません、何か良い感じに殴る気湧かせてくれますよね。藤原さんって」

「私、小倉くんとお話ししたいだけなのに!？」

「藤原さんだけですよ？ 俺をこんな気持ちにさせてくれる人なんて」

「いや、ちよつと良い感じに言っても誤魔化されませんよ私!？」

雰囲気良くしても駄目なものは駄目である。分かっていたことだが、チョロそうだと高を括ったのがいけなかった。

とりあえず、話を戻そう。

「まあ、そんな感じで影薄いんで周りから距離取られてたんですが、その時に話しかけてくれたのが白銀なんですよ。あの時は本当にありがたかったですね。白銀との会話で話しやすいと思われたのか、その後は他の人からも声をかけられるようになりましたし」

「へえ、それじゃあ会長は小倉くんの友達作りのキューピッドさんなんですわね！」  
「そういうことです。感謝してもしきれません」

これは演技ではなく、心からの、小倉の言葉であった。情報を効率良く収集するため  
のキャラ付けで陰気な人間を演じていたが、やはり陰気者に声をかけてくる者はそうは  
なく。

今更方針を変更するのも割と労力があるので悩んでいたところに助け船を出して  
くれたのが白銀御行であつたのだ。

「ねえ小倉くん」

「なんです？」

「私に敬語、要りませんか？ もっと楽に話しましょうよ！」

こう距離をどんどん詰めてくるのは嫌いではない。だが、それだけに自分が気楽に接  
したときにボロを出してしまう確率が跳ね上がってしまう。

本当ならすぐに首を縦に振りたところではあるが、少しでも悩んでしまう小倉で  
あつた。

「……分かりました。努力、してみます」

「約束ですよ！ あ、ちよつとごめんなさい」

断りを入れて、藤原は震えている携帯を耳に当てた。

いくつかのやり取りをしたあと、すぐに彼女は顔を真っ青にする。

「うわああ！ ごめんなさい小倉くん！ 私、この後生徒会室で打ち合わせあるつてすつかり忘れてました！」

「うえ!? それはマズい！ 怒られる奴！」

「また今度ゆつくり話しましょう！ じゃあ！」

すたこらと走っていく藤原の背中を見送る小倉。

嵐が過ぎ去った後とはこれほど穏やかなものなのかと、少々の感動を覚え、彼女との会話の余韻に浸る。

もしも。

もしも自分が四宮に仕えていなかったら。

何も考えずに藤原千花と話せていたのだろうか。

しばし、妄想し、頭を横に振る。

「はあ、疲れてんだな俺。藤原ちゃんとの話を楽しんでもしょうとは」

「本当だね。随分楽しんだね」

「うおお!! 早坂?!」

いつの間に後ろにいたのか。早坂愛が目を細めてそこに立っていた。

「気配消すの止めろ」



「癖になつてんだよね、気配消すの」

「どこかで聞いたセリフだな。いつからそこにいた？」

「捕まつてた所から？」

「最初つからじゃねえか！ 助けろよ！」

「だってえ、小倉くんが書記ちゃんと話しててすつごいニヤニヤしてたから？」

「ギャルモード似合つてねえぞ」

ピシリ、と早坂固まる。

「に、似合つてない……？ これでも私、結構男子から人気あるんだけど？」

「は？ それは話が変わつてくるぞ。他の男子見る目ありすぎるだろう」

「なっ……！！」

「思ったよりバレてるのか。早坂が可愛いことに」

「な、何を言っているの……!?!」

突然の言葉に早坂、赤面する！

その表情に気づかないまま、小倉は半ば怒り気味に続ける。

「悔しいがお前は可愛いからなあ……あんまり目立って欲しくはないんだが、まあそれももう仕方ないか」

「かわ……」

既に早坂、余裕なし！

「お前のことだから大丈夫だとは思うけど、くれぐれも男は選べよ。ろくな事にならない  
そうなら、俺が喝を入れてやるから」

握りこぶしを作る小倉を不思議そうに見る早坂。

そんな彼女の視線に気づいた小倉はその意図を問うと、予想外の答えが返ってくる。

「小倉って、私が彼氏作ってその彼氏からひどい目に遭わされていたら助けに来てくれるの？」

「……あ」

そこでようやく小倉、自分が何を言っていたかを理解することになる。瞬間、完全に  
しくじったことを理解する。

すぐに何か誤魔化そうと思考を巡らせるが、その前に早坂が言った。

「まあ、その時が来たら楽しみに待ってるよ、お・ぐ・ら・さん？」

「うわああ！ 忘れろ！ 今のは忘れろ！」

「忘れませーん。守ってくださいねー」

「恥ずかしい……恥ずかしい……」

既に真つ赤な早坂、赤面する小倉。

2人は気づいていなかった。最近の2人は前より沢山感情を吐き出していることに。

そんな2人に対しての壁が、近づいてきている。

本日の勝敗——引き分け。

## 第18話 早坂愛は聞きたくない

「なあ早坂」

「何よ小倉」

小倉はここに至るまでの経緯を振り返りながら、あえて口に出す。

「何で俺と早坂、デートしてるんだろうな」

「かぐや様に聞いてよ」

2人の男女がそれなりの格好をし、街に立っている。傍から見ればカップルとしか見られないであろう2人の顔は仏頂面。

それもそのはず、これは立派なお仕事なのだから。

どちらともなく2人は歩き出す。目的はない、とりあえず街をぶらぶらするだけだ。

その間に小倉は今日の目的を整理する。

「確か今日つかぐや様が会長をデートに誘わせる場所を探しに行くんだよな？」

「そう。それで1人よりも2人ということでも私も何故か付いて来ることになったってわけ」

「まあ男1人でデートスポットうるつくだなんてしたくなかったから丁度良かったよ。」

お前が来てくれて」

「そ」

——あなた達、デートしてきなさい!

これが主・四宮かぐやから下された特命である。

恋愛頭脳戦は今、四宮の方に傾いている(本人談)らしいので、それをより盤石のものとするべく、更なる手札を増やすのが目的である。

とはいえ、このままだ歩き回るのも芸がなかつたので、とりあえず近くの喫茶店に入って一度作戦を練ろうと早坂が提案する。

早速入店し、席に座ろうとした早坂は小倉の次の行動に驚きを見せる。

「どうぞ、早坂様?」

「何のつもり?」

「まあ曲がりなりにもデートだからな? その辺演出したいな、というこの小憎さが分からんかな?」

「まっつつつつつたく。でもありがと」

一応お礼だけは言うのが早坂愛の良いところだな、というのが小倉の率直な気持ちである。

これでただただ憎らしい存在ならば彼も割り切れた。

だが、彼女はそうではなかった。だからこそ、小倉は彼女に弱かったのだ。

「早坂つていつもコーヒー飲むよな。そんなに好きか？」

「そういう小倉もいつもコーヒーでしょ。そんなに好きなの？」

「質問に質問で返すなよ……。まあそうさな、コーヒーは俺にとつて思い出の飲み物だからな」

「へえ、アンタにもそういうセンチメンタルな思い出があるんだね」

「……覚えてないのか？」

「え？」

正直に言おう。

小倉はこの件に関して、これ以上突っ込まれることが非常に恥ずかしかった。

なにせ、小倉が四宮家に働き始めの頃の話だ。

彼が何か言う前に注文していたショートケーキが届く。

「ほら食おうぜ。これ食ったらあの2人でもハードル高くなさそうな場所ピックアップしに行こう」

「了解」

「やる気十分で嬉しいよ。そんな奴には、ほいこれ」

そう言い、小倉は早坂のショートケーキへ自分のイチゴを乗せた。頼んでおいて何だ

が、小倉は甘いものをあまり食べない。

「良いの?」

「ケーキ本体まで食べる。だが、イチゴまでとなると手に負えなくなる。ということ  
助けてくれ。な?」

「そこまで言うならありがたく頂くね」

そういう所だ、と早坂は僅かに目を細める。

なんだかんだと言いながら、最終的には自分のために何かをしてくれる。ずっと言い  
合いを続けて、ずっとギスギスしてくれていればそれで良いのに。

一口サイズに切ったケーキを口に運ぶ。とても甘い。

ぼーっと咀嚼をしながら、彼女はそこでふと気づく。

(私って、小倉とどういう距離感でいたいのか?)

正直に言おう。

彼との言い合いは決して悪い気持ちにはなっていない。だけど、仕事絡んでしまえ  
ばその手際の良さから謎の対抗心を燃やしてしまう自分もいる。

ならば今この瞬間はどうだろう。

「おーい早坂」

「……」

「おーい」

「……」

「………駄メイド」

「——何か言った？」

瞬間、小倉は彼女から発せられる殺気に似た気配に背筋を凍らせる。

こと仕事に関してではプロ根性が極限まで培われている彼女に対して掛ける言葉には、あまりにも無謀と言えた。

咄嗟に両手を挙げていなくなったら手に持つフォークで串刺しにされていたのではないか、そんな悪い予感が彼の頭をよぎる。

「すまん、いくら呼びかけても上の空だったから喧嘩を売ってみた」

「お望みならいくらでも買うけど？ あ、一週間以内に屋敷出る準備しておいてね」

「何やらかす気だよ！ 謝る！ 謝るから！」

「誠意はこの奢り」

「分かった！ 払わせて頂きますから追い出さないでくれ！」

言われなくても、最初から払うつもりでいた小倉にとってこれはまさに九死に一生を



得た、といった所。財布に沢山用意しておいて良かった、と改めて彼は自分の用意の良さを自画自賛する。

「小倉はさ」

コーヒーを一口飲み、早坂は言う。

「私と仕事していて楽しい?」

「楽しいに決まつてるだろ。どうした急に?」

こういう所も早坂は複雑な感情を抱いていた。

彼はいつもいつも素直に感情を伝える。決して誤魔化さず、はつきりと言う。

某会長や某雇い主も同じくらい素直ならばとつくの昔に交際スタートしているであろう、と確信出来るくらいには。

だからこそ早坂は、その彼の言葉に嬉しさを感じていた。

職業柄、飾らない自分で居られるのは主とそして小倉ぐらい。

中でも小倉に関しては、全く取り繕っていない自分で接していたので、余計に嬉しいのだ。

「まあ、いつもいつもツンケンしている早坂様を見ていると、たまに自信無くすことはあるけどな」

「自信?」

思わぬ言葉に、早坂はつい聞き返してしまった。

あの自信の塊である彼から出る言葉にしてはあまりにも弱気だったからだ。

皮肉でも返されるかと思えば、彼の口から出る言葉は少しばかり自信なさげなもので。

「まあ、分からぬ奴には分からぬってことだ」

「何それ変なの」

「ええい、これ以上突っ込むな早坂。それ食ったら行くぞ」

「おーらい」

どこへ行くこうか、喋りながら2人がそれぞれコーヒーとケーキを食べ進める。

食事終了の寸前、ふいに“その瞬間”がやってくる。

「あれ、早坂?」

「ほらーやつぱり早坂だ」

声のした方を向くと、そこにはいつも早坂がツルんでいるギャル2人が立っていた。

小倉は名前を知らないが、早坂が案外上手く彼女らと付き合えていることだけは知っていた。

「そつちの彼は……もしかして小倉!?!」

「何か雰囲気違くない!?!」

いつも学校で身につけている縁無し眼鏡がなかったら、自分のことはバレないだろうという驕りが招いた結果だけに、小倉は思わず片手で顔を覆ってしまった。

小倉と早坂が何かを言う前に、早坂の友人たちは盛り上がる。

「何で、早坂と小倉がここでお茶してんの？」

「もしかして付き合ってたリ!？」

やんややんやと言われる中で小倉の耳に飛び込んできたのは聞き捨てならないこと  
で。

彼は思わず立ち上がった。

「えーつと早坂さんの友達方、それは勘違いですよ。そんな事あり得ません」

「え……」

早坂が驚いたようなそんな表情で小倉を見上げる。

「俺、結構甘いものが好きでここに来たら、たまたま早坂さんと出くわしたので同席させてもらっただけですよ」

「え、そうなの早坂?」

「……」

友人の問いに黙る早坂を見て、  
「ぎっさ」と誤魔化してくれ」と願いながら小倉は更に  
続ける。

そこで、止めておけば良かったのだ。

「だいたい、俺が早坂さんとだなんて畏れ多いが過ぎますよ。早坂さんだつて困っているからこの話は終わりにしましょ——」

次の瞬間、さつきまで座っていた早坂が立ち上がっていた。

うつむいているのでどんな表情を浮かべていたかは分からない。

しかし、彼女の口から出た言葉で自分はやらかしてしまったのだと言うことだけは良く理解できた。

「私は酷い奴だと自覚してるけど……アンタはもつと酷い奴」

そう言い残し、早坂は荷物を持って、店から出ていった。

止める隙もない、一瞬の出来事であった。

ちらりと見えた、早坂の横顔は——。

「くっそ……こんな事言うつもりなかつただろうが小倉次郎よお」

悲しそうにしていた。

そういう表情なんか浮かべさせてやるものかと、常に頑張ってきたというのに。

彼は、芯にヒビが入ったような感覚を覚えた。

そして、何故か妙に口の中で主張するコーヒーの味。  
「早坂……」

彼女のいない席が、妙にしっくり来ない。

## 第19話 小倉次郎は始めたい

その後の話である。

喫茶店を出て少し歩いた所に早坂がいた。パツと見なくても完全に怒っている事が分かったので、小倉の方から帰宅を提案し、半ば無理やり屋敷に連れて帰った。

一応1人でも遂行は出来る指令だったのだが、小倉の気が乗らなかつたのもある。

いつもの小倉ならば、早坂が帰ろうがなんだろうが指令を確実にこなす。

本人は気づいていなかった。自分が思った以上に自分がおかしくなっていることに。

「——で、何もせずに帰ってきたと?」

そんな状態で、小倉は早坂抜きでの報告を主へ行っていた。

「いやあ面目ないっていうのはこのことなんでしょかね? あっはっは!」

「笑ってる場合ですか」

「もちろん、しくじった時用に事前にピックアップはしてきているので、かぐや様は後でこの『どつきどきデートのしおり』を熟読しておいてくださいね」

常に最悪を想定しているのが小倉次郎である。万が一にもあり得ない失敗に備えて、常に策を練るのが彼であるが、このときばかりはこの習慣に助けられたことはないとい

うのが振り返りである。

そんな彼の周到な準備の成果を、四宮は簡単には受け取らなかつた。

「小倉、あなた自分の顔を鏡で見てないのかしら？」

「……えっと、かぐや様。それは俺の顔が見るに堪えないから整形して来いとかいう暗喩か何かでしょうか？」

「違います！ 私がそんなに嫌な女に見えますか!？」

「嫌な女っていうかおつそろしいお方というか……嘘です！ 嘘嘘！ だから睨まないでくださいよ！」

小倉から返ってきた「減らず口」に、四宮はため息をつく。

同時に彼女は小倉の状態の深刻さを確信する。

「笑顔のつもりでしょうけど小倉、引きつっているわよ」

「……」

顔に手を当てた小倉はその時点で言い逃れを止めた。

「はあ、やつぱかぐや様はおつかないですわ」

「あなたが分かりやすすぎるのよ」

それにしても、と四宮が続ける。それはもう意外そうに。

「早坂と小倉が珍しいわね」

「ええ、まあ何て言えばいいのか分からないんですけど、やつちまったということだけは間違いないです」

「早坂とは話は出来たの?」

「全く。機会を伺っているんですがね」

「これはとぼけたわけではない。事実である。」

あれから顔を合わせても、業務連絡しか出来ず話らしい話もしていない。

否。

この表現は少々逃げに走った。本当の所、小倉は――。

「仕事に戻ります」

「素晴らしい心がけね。でも、貴方の雇い主として助言を1つ」

「助言?」

「今はどうあれ、早坂と貴方は話せるの。話せる内に、ちゃんと話しなさい」

「……はい」



すぐに話せる。そう括った高が小倉にとっての大きなツケとなる。



何が言いたいかというと、そう——。

3 日 が 経 っ て いた。

四宮にはああ言われたものの、中々気まずい状態を抜け出せずにいる小倉である。

いつもならもつと早く仲直りができるはずなのに。

「しくじってる……色々と」

話しかけようとした事は何度もある。しかし学校という環境というのもあり、ちゃんと時間を取れないのも原因の1つであつた。

「どうした小倉？ 浮かない顔だな」

「白銀、見られてたか。恥ずかしいな」

「いつも元気なお前にしてはあまりにも珍しくてな。つい声を掛けてしまったが……迷惑だったか？」

「いいや、全く。むしろありがとう」

白銀御行という男に対しては、妙に口が軽くなる感覚があつた。ついつい早坂の事を相談してしまいそうになるくらいには安心感を覚えられる。

そんな彼の様子を見た白銀は少しの時間、顎に指を添え、黙考する。

「小倉、放課後時間あるか？」

「放課後……は、大丈夫。何もない」

小倉は彼の発言の意図が分からなかったが、とりあえず頷いた。いつもの感じではなかった。真剣な面持ちで言われたからには、簡単に断れるものではない。

(何なんだ……?)

そういう悩んでいる間の時間は早く、あつという間に放課後となった。

すぐに小倉は生徒会室へ向け、歩き出す。

関係者に会わないか少しばかりビクビクしながらも、生徒会室へたどり着いた彼は扉を開ける。

「おう来たか、小倉。それじゃあちよつと手伝つてくれ」

「これは……」

小倉の目の前に並べられていたのは山積みの資料。

何を手伝うのか、皆目見当がつかない。そもそも生徒会の一員でない自分に何をさせるのか。

すると、白銀は座り、その資料を折り始める。

「こうして、こう……2つ折にするだけだ。簡単だろう？」

「お、おう」

「じゃあこっちの半分はお前分。よろしくな」

「……あ、ああそういうことか。何だか良く分からんが了解した」

しばらく無言の時間が続いた。

資料を手に取り、2つに折る。たったこれだけのアクションである。

何かを考えようもない単純作業に、しばし没頭する小倉。

そんな彼へ、白銀は視線を向ける。

「今日は良い天気だな」

「そうだなあ雲ひとつ無い」

折りながら、小倉は答える。集中出来ているのか、余計なことは考えず、ただ思ったことだけを口に出せた。

その様子に少しだけ口角を釣り上げながら、白銀は続ける。

「今日の昼飯は何だった？」

「チキンカツサンド」

「最初の授業、眠かったよな」

「そうだな……あれはもう拷問に近かったよなあ」

「落ち込んでるようだが何があった？」

「ちよつと怒らせてしまった奴が——ッ」

瞬間、白銀の目論見を全て察した小倉は咄嗟に口へ手を当てる。

「……やってくれたな」

「何のことだ？」

単純作業へ意識を集中させ、どうでもいい質問を続けてからの本命の質問。シンプルなたねだが、それ故に効果抜群であった。

「俺はただ、世間話に花を咲かせようとしただけだ。ただそれが、ちよつとばかり友人について一歩踏み込んだ内容になってしまっただけ。そうだろう？」

ここで小倉は初めて、白銀御行に敗北を喫したと認める。同時に、この男はやはり主との恋愛頭脳戦を繰り広げるにふさわしい相手という確信も強めた。

何だかもう取り繕うのを止めた小倉は、可能な限り洗いざらい話に乗ってもらうことにした。

「はあ……何だか悪いな。気使わせてしまったみたいだ」

「俺も少々回りくどかったがな。それでも何か、力になればと思つてな」

「助かるよ。……実は」

とある人物の、とある友人という濃厚な原液を薄めに薄めた表現方法で小倉は今の現状を白銀に話し始める。

人間誰かに話すと自ずと頭の中が整理されるもので、段々小倉のモヤモヤが浮き彫りになってくる。

一通り話を聞いた白銀は今までの話をおさらいする前に、コーヒーを淹れるべく席を立つ。

「砂糖やミルクは？」

「いや、ブラツクのままで。ありがとう」

人間、誰かに不安を話し、コーヒーを飲むと大体は何とかなるものだと誰かが言っていた。そんな事を思い出しながら、白銀のコーヒーを堪能する小倉。

おかげさまで妙に頭がスツキリとしている。

そんな彼に、白銀は少々悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「その友人とやらに良い報告ができそう、といった顔だな？」

「含み笑いを隠しきれていないぞ」

「さて何のことやら。……だがその相手に伝えておいてくれ」

白銀の纏う雰囲気が少しばかり変わったことで、居住まいを直す小倉。こういう時の白銀を、彼はよく知っている。

相手のために、何かをしようと懸命になっている時の表情だ。

「お前とその相手はまだ話が出るんだ。それから逃げると後悔するぞ。絶対にな」

「後悔……」

「そうだ。ほら、こういうことわざがあるだろ。当たって砕けろってな。話してみて、駄

目だったらまた次の手を考えればいいのさ。一度の失敗は全ての終わりではない」  
雲が晴れたような感覚であった。

それを感じた瞬間には、既に小倉は立ち上がっていた。

「白銀、急用思い出したんで、悪いけど書類の折りたたみはこれで終わらせてくれ」  
「了解だ。抜かるなよ小倉」

「もちろんだ」

頑張れよ、と白銀の声を背に受け、小倉は走り出した。

小難しい事を考えるのは、もう止めていた。否、最初からそうだったではないか。  
常に自分はそうして、彼女と接してきた。

だからそう、これはいつも通り。

そして、またいつも通りを始めるため、小倉は気持ちを前に向ける。

「早坂ああああ!!!」

本日の勝敗——まだ未定。

## 最終話 早坂愛は避けられたい

小倉次郎という男が気になったのは一体いつからだろう。

早坂愛は屋敷で掃除をしながら、ふと考える。

そもそも、彼と出会ったのは小さな頃。自分も、主・四宮かぐやも皆、幼い頃だ。彼に対しての感情は何もなかった。ああ、ただ一緒に働く人かとその程度の認識。

そんな自分が小倉と今のやり取りをするようになったのはいつの頃だろうかとか思  
い出してみるが、全く思い出せない。

唯一思い出せることと言えば、いつも彼が突つかかってくることぐらい。仕事ぶりを  
誇示し、常に知識量で上回って来ようとする。

そんな彼に負けず、自分も研鑽を積んだ。おかげさま、といえば良いのだろうか、も  
はや成長の余地はないと思っていた彼女のスキルは更に伸びた。今も、だ。

言葉にこそ出さないが、感謝をしている。

彼と出会わなければ、自分は昔も今も変わらないままだったろう。

——それ故に、早坂愛は避けられたい。

「早坂愛イ!!」

——それ故に、小倉次郎は追いかけたい。

「早坂ア! ちょっと来てくれ!」

「は? アンタ、何言ってるの? 今仕事中なんだけど」

「この後の仕事は全部、俺がやっておいた。だからしばらくの間、お前は自由時間だよ。さあ、来い!」

「ちよ、ちよつと小倉!」

小倉に手を引かれ、連れて行かれる早坂。彼の後ろ姿を見ながら、彼女はまた心に波が起きる。

それを口に出す前に、彼女と小倉はとある場所へとやってきた。

「覚えてるか?」

覚えていない訳はない。この小さな庭は幼い頃、2人の休憩時間が噛み合った時によくここで休んでいた場所だ。

いつの間にかここに来ることもなくなったが、それでもすぐに思い出せるくらいに



は、彼女はここでの時間が嫌いではなかった。

「……まあ、ね。それで？　こんな所に連れてきて何をしたいの？」

「ここなら力まずに喋れそうな気がしてな」

「何を喋るの？　私と、アンタが」

ジロリと睨む早坂を前に、少しばかり後ずさりしそうになるが、それでも小倉は諦めなかった。

白銀にも言われたではないか、逃げれば後悔する。そして、今こうして話さなければ彼は間違いなく一生の悔いとなる確信があった。

「そうだな……さしあたってはこの前の件だ」

「……何の件でしょう？」

「敬語になるな。あれだよ、喫茶店のときだよ」

「あれが？　何？　アンタと私は何でも無く、私が困っている所を助けてくれ　た時の話でしょう？」

何を、こんなにムキになつていられるのだろうか。喋りながら、早坂は疑問を感じていた。さつさとこんな話など切り上げればいいのだ、それだけで終わる事ができる。きつと小倉もそうなれば、それ以上踏み込むことも無くなる。

だと、言うのに。

「小倉にとつて、私はそういう存在で、同僚。それ以上でもそれ以下でもない。そういう事をあの時、小倉は言いたかつたんだよね」

つい話してしまうのだ。

はつきり言つて、早坂は混乱していた。だから必要のない言葉まで言つてしまう。

「私は小倉にとつては何なの？ 自分でも分からない……」

「俺にとつて、早坂は代わりのいない存在だ」

小倉は続ける。

「お前はライバルだ」

「私がライバル？」

「いつもさ、悔しいんだよな。早坂は何でも出来るし、知識も俺より上だ。だからこそ、

俺はいつもお前に追いつきたくて色々やってる」

「小倉も……」

それは図らずとも早坂自身が思つていたことで。どこまでも感覚が似ていることに少なからずの嬉しさと苛立ちを覚える。

「でもな！ 最近、お前のせいで全部に調子狂つてるんだよ。いついかなる時にもお前のことが頭にチラついて仕方がない！」

「へ？」

「ホントは喫茶店であんな事言う気は更々無かつたんだよ！ でも、何か恥ずかしかった！」

「ま、待って」

「ああ、そうさ。俺はあの時、気恥ずかしかった。だから、だから……お前を傷つけた」  
最初は熱かった彼の言葉が徐々に、弱々しくなっていく。小倉も小倉で、既に自分が何を言いたいのか、まとまりがなくなっており、ただ頭の中に浮かぶ感情をそのまま言葉にしていたのだ。

「ごめん。俺、お前の事を傷つけたんだ」

小倉は自然と頭を下げていた。これで許してもらおうとは少しも思っていない。ただ、自分のしたことに対しての責任を取っただけ。

そんな彼へ、早坂は無言で近づく。

「私、ずっとアンタにイライラしてた」

彼女は続ける。

「少し学ぶだけで何でも出来るアンタが憎かった。私がすごく努力してようやく到達出来る所から、更にアンタは成長していく。何でもそう。この屋敷の仕事も、立ち回りも、全部全部」

解けていく、感情が。堰を切っていく、言葉が。

「そんなアンタに負けたくないから、私も更に努力できたの。……アンタの、お陰。そう、アンタのお陰なんだ」

「お前も、そんな事を思っていたのか……」

「私も驚いた。だって、2人して同じことを思っていたんだし」

微笑む早坂。その彼女の笑顔に、小倉はこのずっと抱き続けてきた“モヤモヤ”の影が晴れていくような感じがした。

「俺は、まだお前に思っていることがある」

「何？」

少しだけ、早坂の胸が高鳴った。

期待していないわけではない。しかし、もしも、だ。

もしも、そうだったら自分は何と答えるのだろうか。

一瞬にして、永遠とも言える時間の後、小倉は言う。

「思っていることがある……はず、だ？」

「……Yes」

その歯切れの悪い言葉は何だ、と既に喉元どころか口内にまで上がってきたが、なんとかそれを飲み込む早坂。

彼は言葉を続ける。

「ある、はずなんだ。最初はお前と肩を並べたい、だからずっとお前のことが頭から離れないだけかと思っていた。だけど、何か違うんだよ。親友であり、ライバルであるはずのお前に、何だかよく分からん新しい感情」

「それは、どんな感情なの？」

「分からないんだ。だけど、この感情はそう簡単には言葉に出しちやいけない大事なものであってことくらいは、分かる」

親友であり、ライバルである早坂愛。

小倉はようやくこの感情の片鱗を掴むことが出来た。

彼女に対して抱いているのは、敵対心でもライバル心でも友情でもない、全く新しい感情。言葉には簡単に出せない。だけど、とてもとても大事だっていうことは理解しているこの感情。

だから、これから言う言葉は妥協でも、逃げでもない。

「時間が欲しい。いつになるか分からない。けど、必ずこの感情に答えを出す。その時は早坂、聞いてもらえないだろうか？」

気づけば、小倉は手を伸ばしていた。何でなのか、自分にも分からない。だけど、今この時。彼女が手を取ってくれるのなら。

きつと、それは彼にとって大きな一歩となるはずで。

「はあ……呆れた。まだ良く分かってもない事をペラペラ言ってたんだ」  
「わ、悪いかよ」

「ううん。実を言うと、私もアンタに思っていることがあるはずなんだ。けど私も正直、この気持ちへ正確に名前を付けられているか怪しいんだ」

更に、早坂は近づく。

「だからさ小倉、勝負をしない？」

「勝負？」

「そ、どちらが先にこの気持ちをちゃんと言葉に出来るか、をね」

そつと早坂は小倉の手に触れた。暖かい。彼の心根の良さを表しているみたいだ。

だから、彼女はそれがどれほど尊い事なのかを知っている。

「分かった。この勝負、乗ってやる。お前との勝負は散々やってきて、いつも勝ってるんだ。楽勝に決まってる」

不敵に笑う小倉。

既に2人の間にあった壁は消え失せ、その崩れた壁の向こうには新たな世界が広がっていた。

足下に落ちた壁の破片を見ている暇など、もうこの2人には無かったのだ。

「ふくん、そんな事言って良いんだ？　じゃあ私が何をしてきても楽勝ってことなんだ

ね」

「無論。何があっても、俺が勝つ。これは宣言だよ、早坂」

「そっか。じゃあアンタの隣にいるかぐや様にもちゃんと宣言しておいてね」

「はっ!? かぐや様だと!? いつの間にな!?」

余りにも不意打ち。小倉、超速度で早坂が指差した方へ顔を向ける。

だが、そこには誰も居なかった。

「つて、いないじゃねえか早坂——」

ふわりと、風が舞った。

その時の小倉が感じていたのは、風に舞う早坂の匂いとそして頬に感じる柔らかい感触。

たったの一瞬の出来事だった。

「早坂、さん? 今……」

「楽勝、つて言つたよね?」

既に小倉から離れていた早坂は、つーんとした態度で仕事に戻る気満々であった。

とても追求したい小倉であったが、それを一切許さない早坂。

「おーい! 待つてくれよ早坂!」

「待たない。これ以上サボつてたらかぐや様に怒られるから。少しは考えて」

背中を追いかける彼、それ以上の早足で行く彼女。

謎の鬼ごっこをすることになった小倉と早坂は既に互いの顔を見ていない。  
だからこそ、こう呟けたのかもしれない。

「いつか早坂に」

「いつか小倉に」

「好きだって言って、驚かせてやるんだ」



「小倉ア！ アンタ、いつまでサボってんの?! 早いところAエリアの掃除終わらせな  
！」

「お前の眼は節穴か早坂ア！ とつくの昔に終わって、Cエリアに取り掛かってんだよ  
！ マネージメント能力落ちてんじゃねえのか!？」



使用人達の朝は戦場だ。

いつも通り、小倉次郎と早坂愛は互いに鎬を削り、主のために尽力している。親友にして、ライバル。

だが、少しだけ変わったことといえば。

「ごめんね……私も疲れてて、ね？」

「うおお!!? くつつくな早坂! 近い! 近いわ!!」

「……ふつ。赤くなってるね、おぐらさん?」

「お前な……!」

「つて、小倉アンタ何やって……」

くるりと早坂の背に回り、肩を揉む小倉。

「まあ、疲れてるのは間違いないだろうな。少し休め。お前が心配だ」

「……べ、別にこれくらいは」

もつと前より互いを思いやる事が出来た、ということだろう。

「今日も今日とて、労働基準なんちゃら待ったなしの過酷労働だ。お互い、生き残ろうな  
早坂」

「先にバテてくれてもいいよ。私が全部やるから」

「はっ、言ってくれる。だけど、まあそこら辺全部多めに見て、あえて俺はこう言おう。」

——今日もよろしくな」

「じゃあ今までの言葉全部棚に上げて、あえて私もこう言う。——今日もよろしくされる」

素直でない素直な言葉と共に、2人はコツン、と拳を合わせる。

恋愛は戦！

それはプライドとプライドのぶつかり合い。さながら侍同士の果たし合いと言つても差し支えないであろう。

合戦の場は、東京都港区に拠点を置く私立・秀知院学園。

侍の名は、白銀御行、そして四宮かぐや。

だが！ 残念ながらこの物語はこの侍2人の恋愛頭脳戦ではない！

これは互いが互いを告らせようとする片翼である四宮かぐやの侍女にして親友とも言える少女・早坂愛と、どこまでも愚直に彼女と向き合おうとする少年・小倉次郎との、恋愛伯仲戦なのである！

ここまでの勝敗——引き分け。

これからの勝敗——いつか分かる。そのうちの、未来に。

「小倉、今日の昼食一緒に食べない？ アンタの好きなチキンカツサンド作ろうと思っ  
てただけど」

「良いね。だけど、俺は好きなチキンカツサンド以上にお前が、す、すす、す」

「す？」

「……忘れろ」

「意気地無し。ばーか」

【早坂愛は避けられたい〜有能侍女の恋愛伯仲戦〜 完】